



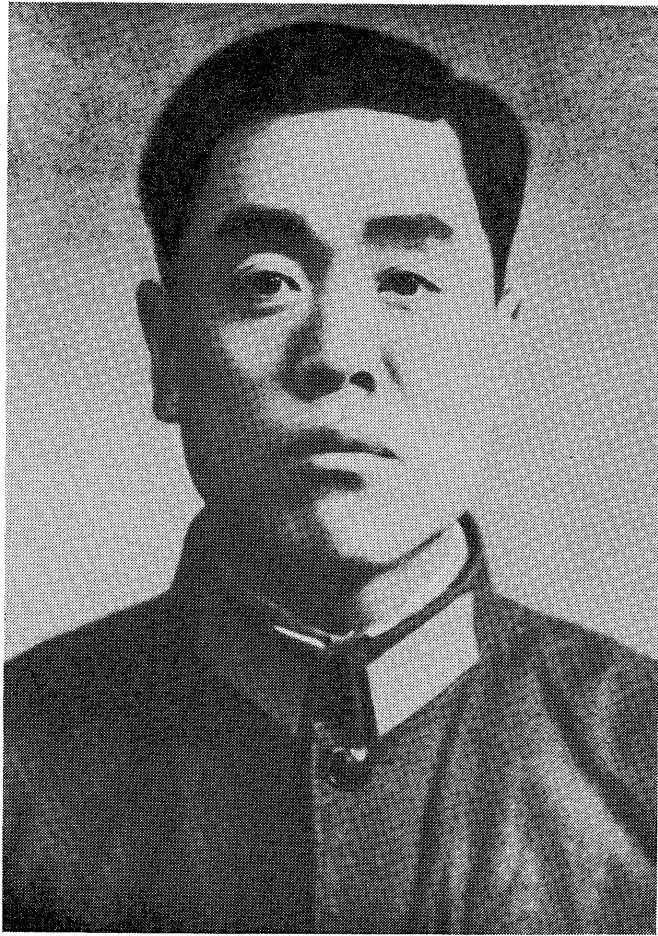
毛主席の革命路線に
限りなく忠誠をつくした
りっぱな幹部——門合

毛主席の革命路線に
限りなく忠誠をつくした
りっぱな幹部——門合

外文出版社
北京

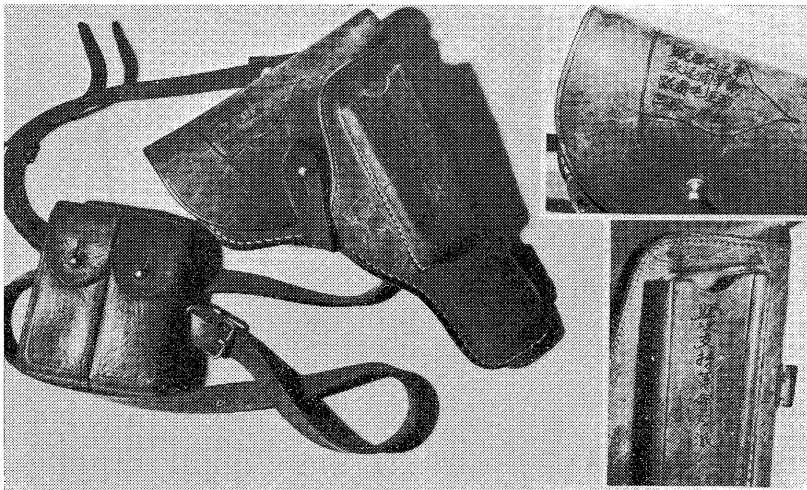
毛主席語録

東風が西風を圧倒するのでなければ、西風が東風を圧倒するのであって、路線の問題では妥協の余地はない。



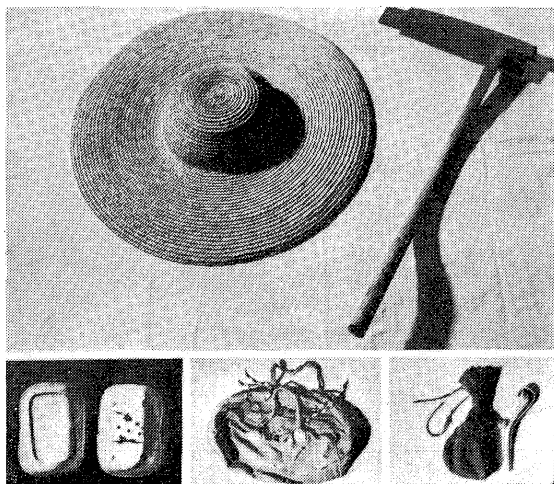
毛主席の革命路線に限りなく忠誠を
つくしたりっぱな幹部——門合同志

門合同志は、毛主席の革命路線に限りなく忠誠を
つくしたりっぱな幹部として、革命事業に
貢献した。彼の忠誠と努力は、同志たちに
大きな教訓を与えた。彼は、毛主席の
革命路線を徹頭徹尾に支持し、実行した
。彼の業績は、革命事業に大きな
貢献をした。彼は、毛主席の革命路線
に限りなく忠誠をつくしたりっぱな幹部
として、革命事業に貢献した。彼の忠誠
と努力は、同志たちに大きな教訓を
与えた。彼は、毛主席の革命路線を
徹頭徹尾に支持し、実行した。彼の
業績は、革命事業に大きな貢献をした。



かたときも身からはなさなかつたピストル・ケースに、門合はつぎのようにかいた。「毛主席にしたがって、永遠に革命をやる。」「だんことして革命の左派を支持する！」

門合同志は、質素で刻苦奮闘する勤労人民の本領を終始たもってきた。写真は、労働のときにもちいたムギワラ帽子と自分でつくったカマ、十数年つかつてきたセッケン箱、手さげ袋、タバコ入れ。



門合同志が学習した毛主席の著作と学習のときにつかつたランプ、懐中電灯など。

門合同志は日記につぎのようにかいている。「一生涯革命をやり、一生涯毛主席の著作を学ぶ。」

平一辈子革命，
讀一辈子毛主席的书。

1965.1.9.



老貧農は、門合同志が社員をひきいて、かれらに新しい家をたててくれたことを永遠に忘れない。

まえがき

新中国の広大な大地に、門合同志に学ぶいく億革命的な人民大衆の運動がまきおこっている。

一九六八年五月二十八日、『人民日報』は、偉大な指導者毛主席とその親密な戦友林彪副主席がみずから批准して中国共産党中央委員会、同軍事委員会、同文化革命小組から「毛主席の革命路線に限りなく忠誠をつくしたりつばな幹部」という光栄ある称号を門合同志に追贈する命令を出したとともに、門合同志に学ぶよう全軍の指揮員・戦闘員に呼びかけた、という重要なニュースを発表した。

門合同志は中国人民解放軍青海省军区某部隊第四連隊第二大隊の副教導員であった。一九六七年九月五日、青海省貴南県の巴倉農場で左派支持の任務にあたった門合同志は、革命的な大衆とともに、雲を散らして雹を防ぐ自製ロケットを装置していた。そのとき、思いがけなく火薬が爆発した。門合同志は、その場にいた二十七名の階級の兄弟をまもるために、猛然と火薬のうえに身をなげかけて、勇敢に自分の生命をささげた。

門合同志は偉大な毛沢東思想にはぐくまれて育った、人民に、党に、毛主席の革命路線に限りなく忠誠をつくしたりつばな幹部であった。かれは革命に参加してから二十年、終始ゆるぐ

ことなく毛主席のプロレタリア革命路線をまもり、裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇をかしらとする党内最大のひとにぎりの資本主義の道を歩む実権派がおしすすめた反革命修正主義路線とだんことしてたたかった。

数十年らい、中国共産党の内部では、一貫して根本的にあい対立する二つの路線のほげしい格闘がくりひろげられてきた。毛主席に代表されるプロレタリア革命路線は、プロレタリア階級と広範な革命的人民大衆の根本的利益をもっとも集中的に代表しており、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会主義の道を堅持し、広範な人民大衆をまもって、帝国主義、現代修正主義、各国反動派とあくまでたたかってきた。劉少奇がおしすすめた反革命修正主義路線は、国民党反動派すなわちブルジョア階級、地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子の利益を代表しており、資本主義の復活をたくらみ、広範な革命的人民大衆を弾圧し、広範な人民をふたたび帝国主義、ブルジョア階級、地主階級の牛馬にしようとしてきた。二つの路線の闘争のあらしのなかで、毛主席の革命路線に忠誠をつくす無数のりっぱな幹部がはぐくまれ、鍛えられたが、門合同志はそうした幹部のなかのきわだった代表の一人であった。

一九五五年、農業協同化の高まりのなかで、門合同志は、農民が社会主義の道を歩むよう積極的に指導し、農村の資本主義的搾取を消滅しなければならない、という毛主席の正しい方針

にだんこたえて、郷里の貧農・下層中農が農業生産協同組合によるこんで加入するようはげまし、援助し、協同組合を大幅に切りすてやつきになって富農経済を存続、発展させ、農業の社会主義的改造に反対する裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇のブルジョア反動路線を強くはねつけた。

一九五七年、生産手段所有制の面での社会主義的改造が基本的に終わったとき、劉少奇は「階級闘争消失論」をけんめいに宣伝して、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子、妖怪変化をとびださせ、これらのものといっしょになって中国共産党とプロレタリア階級独裁に気違いじみた攻撃をくわえた。門合同志はプロレタリア階級の立場にしっかりと立って、ブルジョア右派分子の気違いじみた攻撃にだんこ反撃をくわえ、プロレタリア階級独裁を勇敢にまもった。

一九六一年、門合同志は、劉少奇が農村で鼓吹した「三自一包」と単独経営の邪風をだんこ暴露、批判し、社会主義の集団経済を瓦解させ、農村の社会主義革命を狂気のように破壊し、資本主義を復活させようとする反革命修正主義路線をはねつけて、毛主席の革命路線をしつかりとまもった。

革命化、近代化した軍隊の建設の問題で、門合同志は長年らい一貫して毛主席の建軍思想を

堅持し、毛主席の建軍路線を勇敢にまもった。かれは毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、毛沢東思想を統帥者とし、魂とし、すべての活動の指導方針とした。かれは林彪副主席の指示にもとづいて、毛主席の著作を活学活用し、プロレタリア階級の政治を先行させ、「四つの第一」を堅持し、「三八作風」を大いにおこし、「三大民主」を発揚し、「四好中隊運動」をくりひろげるなど政治建軍に重点をおいた一連の方針、原則を真剣に実行した。門合同志は、党内最大の資本主義の道を歩む実権派の軍隊内における代理人、反革命修正主義分子彭德懷、羅瑞卿らがおしすすめたブルジョア軍事路線と不屈のたたかいをすすめた。また、気違いのように毛沢東思想に反対し、毛主席の著作の学習に反対し、毛主席の建軍路線に反対し、毛主席の人民戦争の思想に反対し、全民皆兵に反対し、政治・思想工作をけなし弱めるかれらの極悪非道の犯罪行為を勇敢に暴露し、はねつけた。

文学・芸術の問題で、門合同志は、労働者、農民、兵士に奉仕し、プロレタリア階級の政治に奉仕する毛主席の革命的文学・芸術路線を堅持した。かれは高度の革命的警戒心をもって、ブルジョア文学・芸術のはん濫を暴露し、はねつけるだけでなく、積極的に攻撃に出、率先して革命的な文学・芸術の出し物をつくって、それで文学・芸術の陣地を占領し、ブルジョア文学・芸術と正面からたたかった。

プロレタリア文化大革命のなかで、門合同志は、革命的大衆運動を弾圧してプロレタリア文化大革命の烈火を消しとめようとする劉少奇のブルジョア反動路線にだんことして反対した。かれは毛主席のプロレタリア革命路線を忠実にまもり、毛主席の偉大な戦略的配置にしっかりとしたが、だんことして革命的左派を支持し、まもり、人民のために新たな功績をたてた。門合同志の一生は、毛主席の著作を活学活用した輝かしい一生だった。かれは毛主席にたいし、毛沢東思想にたいして、自覚的に、徹底的に忠誠をつくした。かれは毛主席の著作をむさぼるように学び、あくまで学習と運用を結びつけ、私心をうち破って公の精神をうち立て、世界観を改造し、偉大な毛沢東思想を自分の魂とした。だからこそ、かれは二つの路線の闘争にたいして高度の自覚をもち、革命的幹部の大節を保持し、大衆をひきいて、毛主席の革命路線を実行し、まもるために生涯たたいぬくことができたのである。かれは大衆を限りなく熱愛し、一貫して大衆と緊密に結びついていた。何度となく危険にぶつかったが、かれはすこしもおそれることなく、自分をすてて人を救い、崇高な共産主義の精神をあますところなく示した。門合同志は、その輝かしい一生をもって、すべて毛主席に思いをはせ、すべて毛主席に服従し、すべて毛主席にしっかりとしたが、すべて毛主席のためにつくすという自分の誓いを実践したのである。

目次

毛主席の革命路線に限りなく忠誠をつくしたりつばな幹部——門合	1
革命のために英雄的に命をささげる	1
確固として左派を支持する	6
毛主席の革命路線をだんことしてまもる	15
「毛主席の建軍原則はだれも変えることはできない！」	24
革命の一戦士	36
英雄は毛主席を熱愛し、毛沢東思想は英雄をはぐくむ	43
*	
*	
*	
門合同志をしのぶ	55
偉大な指導者毛主席にはぐくまれたりつばな戦士	55
門合同志の父 門進忠	55

夫はひたすら毛主席に思いをはせていた

門合同志の妻 張鳳英… 63

「毛沢東思想に合わないものには、わたしは反対する」

門合同志の戦友 某部隊連隊長 古士秀… 69

練兵場での忘れられない話

門合同志生前の所属中隊の分隊長、五好戦士 王和銀… 75

毛主席の革命路線に限りなく

忠誠をつくしたりつばな幹部——門合

革命のために英雄的に命をささげる

一九六七年の秋、青海高原に太陽がさんぜんと輝き、勝利の歌声があちこちであがった。偉大な毛沢東思想の輝かしい光に照らされて、青海省革命委員会が階級闘争のはげしいあらしのなかで生まれたのだ。

海南チベット族自治州の貴南県にある巴倉農場で左派支持の任務を執行していた門合同志は、広範なプロレタリア革命派とともに、野良やテナントのなかで、裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇と青海省におけるその代理人にたいしてはげしい革命的大批判をくりひろげた。同時に、「革命に力をいれて、生産をうながす」という毛主席の偉大な呼びかけにだんことしてこたえ、秋の取り入れをりつばにやりとげて、革命と生産に実りゆたかな成果を

あげようと決意していた。

高原の天気はめまぐるしく変化し、いつ雹になるかわからない。門合同志はげしく変化する大自然の襲撃をしりぞけて、生産をまもるために、連日革命的大衆といっしょに、大自然とたたかう豪壮な気迫をもって、雲を散らして雹の襲来を防ぐ自製ロケットの試作にとりこんでいた。

九月五日の早朝、空模様がにわかに変わり、小雨がしとしと降りだした。門合同志は、毎日のように「老三篇」の学習を終えると、革命的大衆とともに、自製ロケット装置の置場にかかった。「決意をかため、犠牲をおそれず、万難を排して、勝利をたたかいろう」——かれらは道々毛主席の語録を朗唱した。毛主席の教えは、大自然にいどむかれを力強くはげました。戦争の時期に砲火のなかをくぐってきた門合同志は、自製ロケットのとりつけが危険な仕事であることをよく知っていた。仕事が始まると、かれは「これは危険だから、わたしがやるう」といって、ほかの人の手から道具をとりあげ、もつとも危険な火薬装填作業を引きうけた。

自製ロケットはつきからつきへととりつけられていった。みんなは一心不乱に仕事をすすめ

ていたそのとき、思いがけず火薬が爆発した。偉大な毛沢東思想で武装した、私心のない、おそれを知らぬ英雄門合は、危険をおそれず、火薬めがけて猛然と身をなげかけていった。

天地はゆらぎ、煙が天をついた。かれのからだの下からはげしく火が吹き出し、ものすごい爆風がかれを宙に吹き飛ばした。

英雄門合は命を投げ出して、その場にいた二十七名の階級的兄弟をまもったのだ。わが身をすてて人を救う偉大な共産主義の精神で、毛沢東思想の壮麗な凱歌をかなでたのだ。

自製ロケットのとりつけに参加していた人たちが、はげしくあがる煙と炎のなかに、門合同志をみつけ出したときは、かれはすでに息絶えていた。

英雄のまわりに立ちならぶ部隊の幹部と戦士、革命的大衆は、身動きひとつせず門合同志の顔をじっとみつめた。門合同志、目をひらいて、もう一度巴倉の山、巴倉の川を見てほしい、肩をならべてたかかってきた戦友たちを見てほしい、文化大革命がもたらした豊作の情景を見てほしい——人びとはどんなにそう願ったことだろう。みんなは心のそこから、門合は死んではいない、門合が死ぬはずはない、門合は永遠に人びとの心のなかに生きている、と感じている。人びとはもつとも美しいことばで、かれを「草原のタカ」「雪山の青松」とたたえている。

英雄門合は死んだ。だが、人びとは門合同志が自分の命を投げ出して他人を救ったかすかすの英雄的行爲を永遠に忘れないだろう。

十四年まえ門合同志が伝令兵をしていたころ、ある早朝、かれは書類を送りとどけるためオートバイを走らせていた。オートバイが急カーブをきったとき、自転車にのった労働者が突然目のまえにあらわれた。そのままゆけば一瞬のうちに自転車をはねとばす——このとき、門合同志は危険をかえりみず、猛然とオートバイを右側に倒し、自分だけがをし血を流しながら、相手をまもった。

天津市郊外の南大橋大隊の社員たちは、十数年まえ、門合同志が自分のからだで堤防の決壊口をふさいだありさまをいまでもはつきりおぼえている。

それは一九五六年八月、門合同志が小隊長をしていたことだった。連日の大雨で、月牙河の水かさはどんどん増していた。南大橋大隊の貧農・下層中農は夜を徹して堤防の上からこれを見守った。ある日の夕方、堤防が一メートルほどくずれているのを、巡視していた社員がふと発見した。決壊口はみるみるうちに広がっていく。「おーい、堤防がやられたぞ！」かれは大声で人を呼んだ。ちょうど雨のなかを、勤務を終えて帰隊しようとしていた門合同志

はこれを聞くと、いそいで現場にかけつけ、なにもかまわず、濁流のなかにとびこんだ。はげしい流れにたちまち押し流された。だが、どんな困難もかれを圧倒することはできない。門合同志はすばやく水面に浮かびあがって、片手で木の根をつかみ、もう一方の手で杭をかかえて、肩まで没する激流のなかにしっかりと立ち、からだで決壊口をふさいだ。貧農・下層中農もつぎつぎと川にとびこみ、門合同志と肩をならべ、腕を組んで、立ちどころに固い人の壁をつくった。堤防のうえの人たちと川のなかの人たち、軍隊と人民の協力によって、二時間あまりの緊張したたかいのすえ、ついに決壊口はふさがれ、東岸の一万余の人民大衆の生命と財産、数千ムーの作物、道路がまもられた。門合同志は岸にあがると、人びとのさし出す食べ物やお湯に口をつけず、名前もつけずに、びしょぬれの服をきたまま、喜びに胸をおどらせ、兵舎にもどっていった。

五年まえかれが指導員をしていたとき、ある日、擲弾訓練をやっていると、ひとりの戦士が不用意に手投げ弾を自分のところからわずか五メートルとはなれていない場所に落とした。危機一髪、門合同志は、身の危険もかえりみず掩蔽壕からとび出して行って、この戦士をからだでおおい、階級的兄弟をまもった。

文化大革命のなかで門合同志と肩をならべてたたかっていた「八・一八」の戦士たちも、暗雲のたれこめた日々、門合同志が偉大な指導者毛主席の輝かしい思想を巴倉草原にもたらし、革命的大衆とともに、しっかりと毛主席の偉大な戦略的配置にしたがい、闘争の大方向をにぎって、勝利から勝利へと前進したことを、永遠に忘れない。

九月五日、この日はなんと輝かしい日だろう。二十三年まえのこの日、張思徳同志は、完全に、徹底的に人民に奉仕するために、自分の貴い命をささげて、われわれのために共産主義戦士の輝かしい手本をうち立てた。毛主席は「人民に奉仕する」という輝かしい著作のなかでこれをきわめてたかく評価している。二十三年後の今日、プロレタリア文化大革命の凱歌のなかで、門合同志——張思徳同志を手本とし、毛主席の「老三篇」の輝かしい思想にはぐくまれたこの共産主義の戦士は人民に、党に、偉大な指導者毛主席に、毛沢東思想に、毛主席の革命路線に限りなく忠誠をつくすその輝かしい姿をわれわれのまえに力強く示したのである。

確固として左派を支持する

偉大なプロレタリア文化大革命のなかで、門合同志の立場は一貫して確固としており、旗じ

るしは鮮明だった。かれは終始ゆるぐことなく、毛主席の革命路線の側にしっかりと立ち、確固としてプロレタリア革命左派を支持した。

プロレタリア文化大革命がはじまると、門合同志はむさぼるように、プロレタリア階級独裁のもとで革命をおこなうことについての毛主席の理論、路線、方針、方法、政策を学び、『湖南省農民運動の視察報告』など毛主席の輝かしい著作を学んだ。毛主席の偉大な教え、建国いろいろのたびかさなる路線闘争の実践は、門合同志の路線闘争にたいする観念を大いに強めた。かれは同志たちに、「文化大革命の根本問題は権力の問題である。われわれは、党内のひとにぎりの資本主義の道を進む実権派がプロレタリア階級の権力を奪うのを絶対に許してはならない。これは中国が変色するかどうかのもっとも大切な事柄であり、世界革命のもっとも大切な事柄でもある」と語った。

門合同志は巴倉農場に駐在しているあいだ、農場の革命的大衆と呼吸をともにし、運命をともにする血をかけた兄弟のような関係で結ばれていた。かれは農場の資本主義の道を進む実権派の犯罪活動について掌を指すように明らかである。たえず農場の革命情勢に関心をもち、階級敵の動きに十分な注意をはらっていた。

一九六七年のはじめ、プロレタリア文化大革命は怒濤のようにブルジョア階級司令部を襲った。プロレタリア革命派が連合して党内のひとにぎりの資本主義の道を歩む実権派から権力を奪う革命のあらしが青海高原を席卷した。

一九六七年一月二十三日深夜、第五中隊で仕事を手伝っていた門合同志は、巴倉農場の革命的な大衆組織「八・一八」のプロレタリア革命派から、「八・一八」が権力を奪取したが、階級敵が巻きかえしをはかっているので、至急部隊に支援してほしい、という電話を受けた。門合同志が受話器をおいたとたんに、大隊本部から、部隊の左派支持についての毛主席の指示にかなする緊急文書をうけとるため、明朝早く、人をよこすようにと通知してきた。

門合同志はひじょうに興奮して、ひと晩中まんじりともしなかった。その夜、門合同志は、ざん壕のなかの戦士が突撃を待つように、偉大な指導者毛主席の命令を待っていた。

門合同志は深く調査研究をおこなって、巴倉農場の「八・一八」があらしのなかで生まれたプロレタリア革命派であること、かれらにはいろいろとすぐれた点があるが、毛主席の革命路線の側に確固として立っていること、党内のひとにぎりの資本主義の道を歩む実権派にたいして大いに造反していることがなによりもすぐれていることを、はつきり見きわめていた。

一夜が明けると、騎馬伝令兵が偉大な指導者毛主席の「人民解放軍は左派の広範な大衆を支持しなければならない」という戦闘命令をうけとってかえってきた。この戦闘命令は門合同志に限りない力をあたえた。かれは第五中隊の幹部と戦士に、「毛主席の指示こそ革命の方向だ。われわれはだんことして実行し、ただちにそのとおりにやらなければならない」「われわれは確固として『八・一八』を支持しなければならない」といった。

部隊に毛主席の偉大な命令を伝達した門合同志は、胸をはり、大股で農場にゆき、みずからすすんで部隊を代表して、「八・一八」の奪権の勝利を祝った。農場の資本主義の道を歩む実権派と別の大衆組織のなかのごく少数の悪質な頭目どもは門合同志に面とむかって、「『八・一八』の奪った権力は無効だ。われわれが奪権する」とわめいた。門合同志は、「権力はプロレタリア革命造反派が奪うのだ。おまえたちが権力を奪うなど絶対にできない」「われわれはだんことして左派を支持する。これは不動の立場だ」ときっぱり反ばくした。「八・一八」の戦士たちは門合同志の手をかたく握りしめ、「門さん、毛主席の軍隊がわれわれを後押ししてくれているのだから、われわれはどんな困難もおそろしくない。つるぎの山にのぼり、火の海にとびこもうとも、われわれは毛主席がさし示す道をすすむのだ」と感動していった。

それから二十数日後、青海省の党内のひとにぎりの資本主義の道を歩む実権派はプロレタリア革命派に気遣いじみた巻きかえしをおこない、「八・一八」革命派を「反革命」に仕立てあげ、野蛮な弾圧をくわえた。あらしがはげしくなればなるほど、プロレタリア戦士の比類のない確固さはますますはつきりとあらわれ、暗雲がたれこめればたれこめるほど、プロレタリア戦士の赤い心はますますはつきりとあらわれる。門合同志は、毛主席の偉大な教えの学習にいつそうはげんだ。かれは、「暗雲はまもなくすぎさるだろう、暁の光はすぐ目の前にきている」とかたく信じ、いたるところで、「八・一八」の革命的立場について弁護した。あるものが「『八・一八』は妖怪変化だ」というと、門合同志は「『八・一八』の大方向は一貫して正しい」と答えた。あるものが「『八・一八』は反革命だ」というと、「『八・一八』こそ毛主席のいうことをもつともよく聞く」と反ばくした。

赤い太陽の輝きが暗雲を払いのけ、巴倉草原を明るく照らした。偉大な指導者毛主席が時を移さず青海省の問題を発見し、反革命の逆流を粉碎したのだ。一九六七年三月二十四日、偉大な指導者毛主席の声が北京から伝えられてくると、門合同志は胸を高鳴らせ血をたぎらせて、毛主席の塑像のまえにいつまでも立ちつくし、**大海をゆくには舵手にたよる**を声のか

ざりに歌い、手を振りあげて「毛主席万歳！ 万歳！ 万々歳！」と歓呼した。かれは自分で宣伝カーを飾りつけて、その夜のうちに農場に深くはいつて宣伝活動をくりひろげ、毛主席の偉大な声を草原のすみずみにまで伝えた。門合同志は偉大な指導者毛主席の肖像のまえで、「**国家を愛色させないために、一生涯革命をやり、一生涯左派を支持します**」とおごそかに誓った。

「真剣に努力して毛主席の指示を学ぶ
一分一秒もおこたらずに毛主席の指示を宣伝する

完全に、徹底的に毛主席の指示を実行する
確固としてゆるぐことなく毛主席の指示をまもる」

門合同志は左派支持工作のなかで、自分のために定めたこの行動の準則を完全に実行した。

一九六七年五月六日、門合同志は毛沢東思想宣伝隊をひきいて正式に巴倉農場におもむき、ここでの左派支持工作にあたることになった。かれは左派支持工作にあたる同志たちに、「支援にはいろいろあるが、毛沢東思想で左派を武装することが最大の支援だ。大切なことはいろいろあるが、毛主席の指示を実行に移すよう左派を援助することがもっとも大切だ」と語った。門合同志が農場にきて最初に手がけたのは、革命的大衆を援助して、どんなことがあっても

堅持する「毎日の学習」「毛沢東思想の学習体験交流会」などの学習制度をうち立てたことである。かれはみずから革命的大衆組織のために学習計画をつくったり、「老三篇」学習の補習資料を書いたりして、毛主席の著作と毛主席の指示の学習をなによりも重視するよう大衆をみちびいた。いそがしい秋の取り入れ期が近くなったので、農場では奉仕班をつくって、商店を野良まで運んで販売することにした。門合同志は奉仕班の人たちに、「なによりもまず毛主席の著作を野良にとどけてほしい」とくりかえしたのんだ。

巴倉農場は北京から遠くはなれていたが、門合同志の心はいつも毛主席によせられていた。草原は交通が不便なため、その日に新聞を見ることができない。門合同志は毎晩人が寝静まったころ、ラジオを入れて、毛主席の指示とプロレタリア階級司令部の戦闘命令を一字一句もろさずに書きとめ、それをすみやかに宣伝し、だんこ実行して、毛主席のあとに一步もはなれずしたがっていった。

農場にきてまもなく、門合同志は「八・一八」の内部に分裂の兆候があることに気づいた。少数の指導的なメンバーが一部の人たちをひきぬいて、別の組織をつくろうとしており、それは革命的大批判に影響をおよぼし、闘争の大方向をかく乱していた。ちょうどこのとき、

毛主席が「われわれの隊列のなかの小ブルジョア思想をプロレタリア革命の軌道に導いていくことに習熟しなければならない」という指示を出した。門合同志はすばやく行動をおこし、すぐに「八・一八」の戦士たちといっしょに毛主席の指示を学び、「老三篇」を武器にして、「私」をうち破り、「公」をうち立て、ブルジョア階級の派閥性を大いにうち破り、プロレタリア階級の党性を強めた。かれは、革命的大批判を深く、りっぱにくりひろげるよう、みんなを動員した。かれは、「毛主席は『絶対に階級闘争を忘れてはならない』とわれわれに教えている。共産党とは階級闘争をおこなうものであり、革命とは階級闘争をおこなうことなのだ。革命を最後までやりぬくには、毛主席の著作をいっそうよく活学活用し、団結して敵にあたり、革命的大批判をより深く、りっぱにおこない、闘争の大方向をしっかりとつかまなければならぬ」と語った。門合同志の援助で、「八・一八」は分裂をまぬがれ、団結を強めて、革命的大批判を力強くおすすめた。

毛主席が、プロレタリア革命派は革命的大連合を実現し、運動の初期に劉少奇がおすすめたブルジョア反動路線にだまされた大衆にきめのこまかい思想・政治工作をおこなうよう呼びかけた。門合同志はただちに、「八・一八」のプロレタリア革命派が真剣に学習し、だんこど

して呼びかけにこたえ、革命的大連合の模範となるように援助した。かれは、「だまされている階級の兄弟をひとりでも多く毛主席の革命路線の側に立ちもどらせれば、毛主席の革命路線をまもる力がそれだけふえるのだ」といって、だまされている大衆に積極的にはたらきかけるよう、みんなを動員した。門合同志は革命的大衆組織が「一幫一（一对一で助けあう）」活動をくりひろげ、一人ひとりが思想・政治工作をおこなうよう援助するとともに、自分自身もその先頭に立って、だまされている大衆の心のそこにくはくはといってはたらきかけた。ある夜更け、門合同志は毛主席の書をしっかりと手にもち、月あかりを踏みながら、寒風のふくなかを、五キロあまり先のだまされている同志の家を訪れた。ランプの光の下で、二人は、「どんな政党にとっても、どんな個人にとっても、誤りは避けがたいもので、われわれに必要なことは、誤りを少なくすることである。誤りをおかしたならば、あらためることが必要で、あらためるのは、はやければはいほどよく、徹底的であればあるほどよい」という毛主席の教えを学んだ。門合同志は「つまずいたら歩くことを覚えればよく、おぼれて水を飲んだら泳ぎを覚えればよい。革命的精神をふるいたたせ、思いきり銃口の向きをかえて、文化大革命のなかで新しい手柄をたてようではないか」とその同志を上げました。その同志は強く胸をうたれ、

毛主席にしたがって最後まで革命をやりぬくとかたく誓った。

門合同志は、毛主席の指示が一日でも実行されないと、その日一日食事がろくにのどをとおらず、睡眠がよくとれず、気持ちがおちつかなかった。

八月二十八日、門合同志が大隊での会議を終えて農場にもどったとき、すでに夜はすっかり更けていた。ラジオを入れると、毛主席の「擁軍愛民」の偉大なよびかけがきこえてきた。かれはもう眠れなかった。翌日、夜が明けると、かれは第五中隊の副指導員と相談し、ただちに部隊を組織して「愛民公約」をつくり、愛民活動をくりひろげた。かれはまた、みずから第五中隊の毛沢東思想宣伝班を指導して文芸の出し物を大急ぎで準備し、毛主席の偉大な呼びかけを大衆に深く宣伝し、農場の駐在部隊と大衆のあいだに擁軍愛民の高まりをまきおこした。そして、九月五日、門合同志は毛主席の「擁軍愛民」の偉大な呼びかけをみずから実践し、鮮血と生命をもってはげしく人の胸をうつ左派支持・人民愛護の新しい一章をつづいたのである。

毛主席の革命路線をだんことしてまもる

「いつも毛主席の革命路線のために、しっかりと歩哨に立ち、持ち場をまもり、戦う！」こ

れはさんらんと光を放つ門合同志のことばである。

建国後十八年らい、門合同志は、「銃をもった敵が減ぼされてからも、銃をもたない敵は依然として存在する」、「われわれは絶対に自己の警戒心をゆるめてはならない」という毛主席の偉大な教えを心に刻み、一貫して階級闘争の動きを注意深く見まもってきた。二つの階級、二つの道、二つの路線の格闘のなかで、かれは戦争の時代と同じように、高度の警戒心と比類のない確固とした階級的立場をそなえたプロレタリア戦士であった。

一九五五年、全国人民は毛主席の偉大な呼びかけに熱烈にこたえて、すさまじい農業協同化の高まりをまきおこした。階級敵の搾取と抑圧の苦しみをなめつくしてきた門合同志は、毛主席のさし示す農業集団化の道こそ広範な農民が徹底的に解放をかちとる光明にみちた大道であることを深く知っていた。かれは、しっかりと毛主席の革命路線にしたがい、郷里の貧農・下層中農が組合にはいるのを熱情をこめてはげまし、援助した。家からの手紙で、母が土地改革のときにもらったラバを組合に出すのをいやがっていると聞くと、門合同志はひじょうに心配し、さっそく手紙を書いて、母が昔の苦しみを思いおこし、今のしあわせを知るよう援助し、単独経営がなぜ悪いのか、集団化の道がなぜよいのかを説明し、毛主席の教えをまも

り、しっかりと毛主席についていくようにいった。門合同志は、毛主席は自分たち一家、苦しみを受けたなん干なん万の貧乏人を解放してくれたのだ、毛主席がいなかったらいまの自分たちはない、いま、毛主席はわたしたちに社会主義の光明にみちた大道をさし示してくれているが、わたしたちが歩まなかったら誰が歩むのだ、わたしたちが毛主席の教えをまもらなかったら誰がまもるのだ、と手紙に書いた。門合同志の辛抱づよい援助によって、母はすぐに認識を高め、よるこんでラバをつれて協同組合に参加した。門合同志とかれの父母の影響を受けて、全村の貧農・下層中農は、農村に長期にわたって富農経済を存続、発展させようとして農業の社会主義的改造に反対する党内最大の資本主義の道を歩む実権派劉少奇の反革命修正主義路線をはねつけて、農業生産協同組合づくりの高まりをただちにまきおこした。

一九五七年、ブルジョア右派が中国共産党の整風の機会に乗じて、プロレタリア階級独裁に気違いじみた攻撃をかけてきた。門合同志は、はげしい怒りをいだいて、すぐさま積極的に戦闘に身を投じた。ある日、右派が共産党と「交替で政権を執る」とわめきたてているのを新聞で見て、かれは腹のそこから怒りをおぼえ、すぐ全小隊の戦士に集合を命じた。かれはみんなを当時勤務していた天津飛行場に連れてゆき、国民党匪賊一味が敗退のさいに残したトー

チカのまえで、自分の一家三代の血涙史をもって、国民党反動派の極悪非道の犯罪行為を怒りをこめて糾弾した。「共産党が政権を執るか、国民党が政権を執るかのどちらかだ。交替に政権を執るなどということはありえない。あえて共産党と天下を争うものには、われわれの手中の鉄砲がそれを許すかどうか、はっきりと知らせてやる」とかれはきっぱりといった。

暗雲のたれこめた日々、門合同志は新聞がとどけられるたびに、右派にたいする反ばくの文章がのっていないかどうか、大急ぎですみからすみまで目をとおした。その日が、とうとうやってきた。「人民日報」で、反撃の信号——『これはなぜか』という社説を見たとき、門合同志はとびあがってよろこんだ。かれは党支部の指導のもとに、積極的に戦士を組織して討論会をひらいたり、原稿を書いたりして、ブルジョア右派に猛烈な反撃をくわえた。

一九六一年、劉少奇が農村で「三自一包」①の黒い風をまきおこしていたとき、門合同志は第五中隊の指導員をしていた。ある日、安徽省出身の戦士が帰省を終えてもどってきた。帰省した戦士と話しあって活きた思想をつかむようにしていた門合同志は、さっそくこの戦士とひ

① 自留地を多くのこし、自由市場をふやし、損益にみずから責任を負う企業を多くし、農業生産の任務を一戸ごとに請け負わせること。

ぎを交えて話しあった。その戦士は、自分の故郷では、土地がまた各農家に分配されそれぞれの手で耕されている、自分の家でも土地のほかにロバの足を一本（二頭のロバが四戸に分配されたこと——訳者注）もらった、といった。これを聞いて門合同志は愕然とした。かれは、その高度の政治的敏感さで、農村における二つの道の闘争が、すでに深刻なものになって目のまえにあらわれてきていることをすばやく感じとった。部隊は真空のなかで生活しているのではない。この闘争は安徽省にだけあらわれたものだろうか。それは戦士たちにどのような影響をあたえているだろうか。こうした一連の問題が門合同志の心に重くのしかかった。この安徽省出身の戦士と話しあってから、かれはその夜のうちに勤務地点をくまなくかけまわって、大体の様子をつかんだ。

門合同志は勤務地点からかえると、ただちに幹部会議をひらき、調査してきた状況にもとづいて、中隊で社会主義教育をおこない、「三自一包」の黒い風に反撃をくわえることをだんことして決定した。毛沢東思想にみちびかれて、「人民公社がよいか、それとも単独経営がよいか」をめぐる討論が全中隊でくりひろげられた。門合同志は、全中隊の軍人大会で先頭に立って昔の苦しみを思いおこし、単独経営の罪悪を糾弾した。かれはこう語った。「単独経営の

道は血で染められた道であり、人が人を食う社会に後退する道である。いままたこの単独経営の風をまきおこしているものがあるが、われわれはだんことしてそれを撃退しなければならぬ。毛主席は、わが国の社会主義革命が基本的な勝利をおさめたのちにも、社会では、まだ一部の人が資本主義制度の復活を夢みている、と教えている。われわれは警戒心を高めなければならぬ」

門合同志の話は、戦士たちの胸をうった。戦士たちはつきつきと、昔の苦しみを思いおこし、今のしあわせをかみしめ、「三自一包」を怒りをこめて糾弾し、人民公社のすばらしさを大いに語った。門合同志はみんなの討論にもとづいて、「人民公社の十大優位性」と「単独経営の八大危害性」をまとめあげ、いたるところで宣伝した。また、全大隊が「家へ手紙を書く」活動をくりひろげて、親戚や友人が目をはつきりとひらき、「三自一包」をはねつけて、社会主義の集団経済をまもるよう援助することを大隊委員会で提案した。こうして、赤いたよりがつきからつきへと祖国の各地に送りとどけられた。

やはりそのころ、門合同志は戦士たちとともに、数百冊の毛主席著作と、全中隊の同志が寄付した千余元をたずさえ、社会主義事業を熱愛する赤い心をいだいて、山や峰をこえ、風雪を

ついて、近在の人民公社をたずね、「人民公社はすばらしい」という毛主席の偉大な呼びかけ、人民公社を支持する人民解放軍の決意を、草原のチベット族同胞に伝えてまわった。

はげしい階級闘争をつうじて、門合同志は、生産手段の所有制の社会主義的改造が基本的になしとげられたあとでも、「階級闘争はまだおわってはいない。プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだの階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだのイデオロギー面での階級闘争は、なお長期にわたる、曲がりくねったたかいであり、ときにはひじょうに激しいものでさえある」という、プロレタリア階級独裁の条件のもとでの階級闘争にかんする毛主席の偉大な学説を深く体得した。門合同志は、毛主席の教えを心に刻みつけ、高度の革命的警戒心をもって、階級敵の攻撃をいつでも粉碎できる準備をととのえていた。

封建主義、資本主義のふるい劇がはん濫していたころ、かれはある日、中隊をひきいてある交歓会に参加した。戦士たちの革命的文芸の出し物が終わると、その資本主義の道を歩む実権派が一部のものに才子佳人の芝居を演じさせた。ドラや太鼓が鳴って、役者が姿をあらわすと、門合同志はすぐに中隊の全員をひきいて退場してしまった。ある人が「どうして芝居を見

ないのですか」とたずねると、かれは憤然としてこう答えた。「こんな毒草の劇を見てなにになる。そんな時間があったら、帰って雷鋒①の物語でも読むよ」

門合同志は、毒草の劇を見ないだけではいけない、積極的に攻撃に出、革命的現代劇でそれをねつけ、おしのけてしまい、舞台を毛沢東思想宣伝の赤い陣地にしなければならぬ、と考えた。そこで、かれは文芸活動に、これまで以上に熱をいれ、自分で出し物の準備をし、みずから舞台に立った。まるで重大な戦闘を組織するかのようになり、大きな力のかたむけて、この活動にとり組んだ。

中隊の文工隊のなかに、文芸活動に熱をいれない戦士がいた。その戦士は、戦士の本分は銃

- ① 雷鋒は中国人民解放軍瀋陽某部隊の運輸中隊の分隊長であった。かれは毛主席の著作の学習に励み、とりわけ「活用する」面で努力をかさねていたため、高度の政治的自覚をもち、プロレタリア階級の立場もしっかりしており、誠心誠意人民に奉仕するだけだかい品性をそなえ、三度も手柄を立て、模範的な共産主義青年団員として表彰された。かれは一九六〇年十一月に中国共産党に加入した。一九六二年八月、公務中に殉職した。毛主席はみずから「雷鋒同志に学ぼう」としたため、その死を悼んだ。

をもち、「武芸」を練ることであって、ひいたり、うたったり、はねたり、おどったりするのは、みんなを楽しませるだけで、大した意義はないと考えていた。こうした考えにいちはやく気づいた門合同志は、ある晩、この戦士のところへ話しにいった。二人は生い茂った牧草のうえを歩きながら、仕事のこと、生活のことから学習のことまで、ざっくばらんに話しあった。門合同志は親しくたずねた。

「このまえ、西安に帰省したとき、芝居を見たかね」

「ええ、革命的現代劇△紅灯記△△沙家浜△△赤軍女性中隊△△を見ました。たいへんすばらしかったですよ」

「それらの劇はだれの指導でできたか知っているかね」

「そんなこと、だれでも知っていますよ、江青同志です」

門合同志はかれの手をとって草むらのうえにすわらせ、親しみをこめて厳肅にいった。「江青同志が演劇をこんなに重視するのはなぜだろうか。それは毛主席の革命的文学・芸術路線をつらぬくためであり、例の帝王将相、才子佳人を舞台から追い出し、階級敵に資本主義の復活をやらせないようにするためだ。われわれは『武芸』をやるものだが、けっして文芸をおろそ

かにはならない。われわれは鉄砲をにぎるとともに、ペンもにぎらなければならない」そういうって、門合同志はポケットから『延安の文学・芸術座談会における講話』をとり出して、この戦士といっしょに学習しはじめた。

門合同志はこのように、毛主席のことばに一字一句耳をかたむけ、毛主席の革命路線に一步歩びたりとしたがい、敵が毛主席の革命路線に攻撃をかけてくれば、かれはどこであろうと主動的に、だんことして反撃をくわえるのだ。

「毛主席の建軍原則はだれも変えることはできない！」

「『八つぎきにされようとも、あえて皇帝を馬からひきずりおろす』、われわれは、社会主義、共産主義のためにたたかうさい、こうしたなにもをもおそれない精神をもたなければならぬ。」

門合——この人民に、党に、毛主席に忠実であった英雄的な戦士は、二つの路線のはげしい格闘のなかで、なにもをもおそれぬプロレタリア階級の革命的精神をもって、反革命修正主義分子彭德懷、羅瑞卿がおしすすめたブルジョア軍事路線をだんことしてしりぞけ、毛主席の

革命路線をまもる硬骨漢の名をはずかしめなかった。

一九五六年、門合同志がある中隊で小隊長をしていたときのことだ。かれは、軍をのっとり党に反対する大野心家彭德懷がおしすすめる例のさまざまな外国のドグマがひじょうに気に入らず、「このやり方のどこが毛主席の教えに合っているというのか。こんな外国かぶれしたことをやり出したために、わが人民軍隊の栄えある伝統がすっかり失われてしまった」と怒りをぶちまけた。かれは「民衆が軍隊を自分の軍隊とみなせるように、軍隊は民衆と一体になるべきで、そうなれば、この軍隊は天下無敵となる」という毛主席の教えを銘記していた。かれは、軍隊に階級制が実施されて、肩に二つのかたい肩章をのせるようになる、物をになうことも、かつぐこともできず、大衆から遠ざかるようになるだろう、と考えた。そこで、かれはいつもかたい肩章をつけた上着をぬいで、そでをまくりあげ、戦士といっしょに水をかつき、掃除をし、便所のくみとりをやった。また労働者といっしょに天津新港を建設し、農民といっしょに急いで取り入れや種まきをし、こうして、かれは人民大衆から一貫して勤労人民のりっぱな息子とみなされていた。

門合同志は、下級の方が上級のものに合ったときとなえる「報告のことば」のような形式

主義的なものにだんこととして反対した。ひんばんに出入りする戦士たちが、ときには「報告のことば」をまちがえることがあった。だが、かれは一度もそれを批判したことがなかったばかりか、戦士たちに、「こんな外国のドグマなどすっかり忘れてしまったほうがよい。だが、人民軍隊の栄えある伝統は、しっかりと覚えておこう」といった。

一九五七年の夏、全連隊の幹部輪番訓練班で、門合同志は一つひとつ事実をあげて、中国人民解放軍の建軍原則と栄えある伝統を破壊する「外国のドグマ」を痛烈に批判した。「毛主席は、赤軍、八路軍の光栄ある伝統を学ばなければならないと教えているのに、なぜこんな外国のドグマを学ばせようとするのか」とかれはするどく指摘した。かれの発言は多くの同志から支持された。ところが、門合同志の発言はまちがっている、かれにたいする「批判」会をひらけというものもいた。だが、どんなにひどいレッテルをはりつけられようと、門合同志はいつも、「毛主席の教えに合わないものにはわたしはだんこ反対する」ときっぱりといた。

一九五九年、毛主席がみずから主宰した党の廬山会議で、軍をのっとり党に反対する大野心家彭徳懷の陰謀の徹底的な破産が宣告された。それから、林彪副主席が中国共産党中央軍事委員会の仕事を主宰し、そしてみずから指導して、偉大な歴史的意義をもつ『軍隊の政治・思想工作を強化することについての決議』を制定した。この「決議」は、古田会議①の栄えある伝統をうけつぎ、四つの第一②をうち出して、政治工作とわが軍の建設の方向を明らかにし、毛沢東思想をしっかりと身につけなければならないという偉大な呼びかけをおこなった。

① 古田会議とは、一九二九年十二月、福建省上杭県にある古田村で、毛主席が指導して開かれた偉大な歴史的意義をもつ赤軍第四軍の党の第九回代表大会のことである。毛主席が起草した画期的な輝かしい歴史的文献、党と軍隊の建設綱領である『党内のあやまった思想の是正について』はこの会議で採択された。

② 林彪副主席は、毛沢東思想を創造的に運用して、政治工作の領域における四つの関係を正しく処理する問題をうち出した。つまり、武器と人との関係进行处理するときには、人の要因を第一位に置くこと、政治工作とその他の各種の工作との関係进行处理するときには、政治工作を第一位に置くこと、政治工作のなかの事務的な工作と思想工作との関係进行处理するときには、思想工作を第一位に置くこと、思想工作のなかの書物からくみとった思想と生きた思想を処理するときには、生きた思想を第一位に置くこと。

これは中国人民解放軍の政治・思想工作の方向であり、全軍隊建設の方向でもある。

これは、わが軍の建軍史上における新しい里程標である。連隊でこの伝達を聞いた門合同志はその夜のうちに「決議」を一字一句ノートに書きうつして、真剣に学んだ。これこそ毛沢東思想の偉大な勝利であるということをかれば深く体得した。そして、このうえないよろこびをもって、会う人ごとに、「毛主席はじつに英明で偉大だ。毛主席のような英明で偉大な指導者がいることは、われわれにとって最大のしあわせだ」と感動をこめて語った。

一九六二年、党の第八期中央委員会第十回総会で、毛主席は「絶対に階級闘争を忘れてはならない」と全党をいましめた。毛主席のこの英明な教えは、階級闘争と路線闘争にたいする門合同志の自覚をいっそう高め、毛主席の革命路線のためにしっかりと歩哨に立ち、持ち場をまもり、戦ううえで、このうえない大きな力をあたえた。

一九六四年、反革命修正主義分子羅瑞卿は、軍事技術大競演の邪風をまきおこして、わが軍建軍の方向を変え、軍をのっとり党に反対する腹黒い野望をとげようとたくらんだ。この大事なときに、門合同志は「党内のあやまった思想の是正について」という毛主席の輝かしい著作をくりかえし学び、毛主席の政治は統帥者であり、魂であるという英明な教えを真剣に体得し、「軍隊の政治・思想工作を強化することについての決議」をあらためて学んだ。かれの心

はいっそうからっと明るくなった。軍事だけが必要で、プロレタリア階級の政治は必要でないなどということが、どうしてありえよう。これは彭徳懐の例のやり口と同じように、毛主席の建軍路線に反対するものである。「革命に害をあたえる誤った指導は、無条件に受けいれるべきではなく、断固として拒否すべきである。」かれは勇敢に立ちあがって、プロレタリア階級の政治を押しながすことに反対し、「最優秀者」ばかりをかき集めること（全分隊の訓練の「成績」をあげるためのみこみがおそく、動作ののろいような戦士は「最優秀分隊」から出して、かわりに他の戦士をいれること）に反対し、優勝主義に反対することをはっきりと表明した。この年の四月のはじめに、連隊の訓練がかりのある参謀が、門合同志のいた第五中隊の軍事訓練の状況を知るためにやってきた。ある日、その参謀は門合同志に、「最優秀分隊」の訓練を強化する問題を出した。門合同志はすぐに、「プロレタリア階級の政治をつかむことに力をいれないで、軍事ばかりに力をいれるのは、毛沢東思想にぜんぜん合っていない」とだんこととして反ばくした。ある同志が「門さん、あんまりたてつかない方がいい。そんな調子でやると、誤りを犯すことになるぞ」と忠告したが、門合同志は「毛沢東思想に合わないものは、わたしは反対する。わたしを罷免しないかぎり、『最優秀者』をかき集めたり、軍事を先

行させたり、プロレタリア階級の政治を排除したりすることはできない」ときっぱりとこたえた。

門合同志のだんことした反対にあって、第五中隊の『最優秀分隊』訓練の工作は遅々として進まなかった。連隊本部からその参謀に、訓練に力をいれ、兄弟中隊のために模範演技ができるようにしておくよういつてきたが、門合同志はあいかわらず毛主席の著作の活学活用に思いきり力をいれ、思想・政治工作に思いきり力をいれた。かれはひまをみつければ戦士たちと話しあい、生きた思想工作をおこなった。これ以上腹立ちを押えきれなくなったその参謀は、いったいどうするつもりだ、とかれにたずねた。門合同志は別に気にもとめず、「わたしが中隊にいるかぎり、毛主席の著作の学習に力をいれます。四つの第一を堅持することは、指導員としてのわたしの最大の職責であり本分です」とこたえた。

第三分隊が「最優秀分隊」に指定されると、第一回目の講義で門合同志は、軍事についても技術についても語らず、まずみんなといっしょに、『人民に奉仕する』を学んだ。そして、「兵を練るとは、主として人民に奉仕する思想を練ることであり、人民に奉仕する作風を練ることである」といった。かれはいつも分隊のなかに深くはいつて、戦士たちに戦闘英雄の物語

を話してきかせた。「かつての戦争のころ、あれほど多くの英雄があらわれたが、竿をよじのぼるのがうまくて英雄になったものがあるだろうか。屋根にのぼるのがうまくて英雄になったものがあるだろうか。董存瑞①は爆薬の包みのささえかたを練習しただろうか。黄継光②は銃

- ① 董存瑞（一九二九年～一九四八年）は、中国人民解放軍の戦闘英雄である。かれは河北省懷来県の生まれで、一九四五年八路軍にくわり、一九四六年中国共産党に入党した。一九四八年五月二十六日、解放軍が熱河省隆化県（今は河北省に属する）に総攻撃をくわえた戦いのなかで、部隊の前進する最後の障害物を取り除くため、かれは敵のトーチカがとぐろをまいている橋の下へ突進していき、毅然と自分の手で爆薬の包みを支え、橋げたにあてて導火線をひっぱった。敵のトーチカは爆破され、勝利のうちに任務をはたしたが、かれ自身も壮烈な最期をとげた。

- ② 黄継光（一九三〇年～一九五二年）は、四川省中江県の生まれである。一九五一年三月、中国人民志願軍にくわわって、戦士、伝令兵をつとめた。一九五二年十月、朝鮮での世界に名を知られた上甘嶺の戦闘のなかで、敵の隠べいたトーチカを攻めおとして同志たちの前進を掩護するために、かれは重傷を負っていたにもかかわらず、ひきつづき戦闘を堅持した。最後に、部隊が高地を攻めおとす任務をはたし、敵の二コ大隊を全部殲滅するのを保障するため、身をもって敵の機関銃の銃眼をふせいで壮烈な戦死をとげた。そしてかれは中国共産党員に追認され、「特級英雄」の称号を授けられた。

眼のふさぎかたを練習しただろうか。だが、かれらは、人民がいったん必要とする場合には、あのような驚くべき事業をやつてのけたのだ。われわれは、最大の戦闘力は毛沢東思想で武装した人間である、という林副主席の英明な指示を絶対に忘れてはならない」

「最優秀分隊」が軍事技術大競演に出かける前夜、門合同志はみんなに、どんな考えでいるのか、とたずねた。なかには、「きつと優勝してみせます」というものがいた。門合同志はそれを聞くと、さっそく『毛主席語録』をとり出し、一字一句に力をいれて、みんなに読んでさせた。「軍隊の基礎は兵士である。進歩的な政治精神を軍隊にそそぎこまなければ、それをそそぎこむ進歩的な政治工作がなければ、上官と兵士とのあいだの真の一致は達成できないし、将兵の最大限の抗戦の熱情を燃え立たせることはできないし、すべての技術や戦術も、それにふさわしい効力を發揮する最良の基礎はえられなくなる。」かれは、深い階級の感情をいだいて、毛主席の建軍原則をくりかえし戦士たちに話し、「われわれががちとらなければならぬのは、政治・思想の第一位であつて、絶対に軍事・技術一点張りの第一位ではない。この点をけつして忘れないでほしい」となんども念をおした。ある幹部会議で、「最優秀分隊」では政治教育をやめて、軍事訓練を先行させるべきだ、と主張するものがいた。門合同志はこれ

にたいして、毛主席著作の学習時間はゆずれない、ふだんの政治教育の時間はゆずれない、新聞を読む時間はゆずれないという「三つのゆずれない」を堅持した。かれが正しい立場をつらぬいたので、かれのいた中隊では、「毎日の学習」、政治課目、思想・政治工作はあくまで続けられた。かれは、「毛主席の建軍原則は、だれも変えることはできない」ときっぱりといつた。

一九六五年のはじめ、門合同志は連隊の党委員会拡大会議で、毛主席の親密な戦友林彪副主席が出したプロレタリア階級の政治を先行させることについての指示をきいて、ひじょうに感激した。かれは、「林副主席は高い所に立ち、遠くまで見通し、毛沢東思想の赤旗をもっとも高くかかげている。その一字一句がわれわれの気持ちをいいあらわしている」とくりかえし語った。中隊に帰ってくると、かれはすぐに党支部拡大会議をひらき、林副主席の指示を伝えた。その席上で、かれは、「プロレタリア階級の政治を先行させることは、林副主席が毛主席の建軍思想にもとづいてうち出したものであり、わが軍の革命化の根本である。この根本をしっかりつかめば、われわれのこの軍隊は無敵の、勇往邁進する軍隊となる」となんども強調した。林副主席の指示をつらぬく運動が全中隊に急速にもりあがった。門合同志は戦士たちと

いっしょに一枚の赤旗をつくり、そのうえに、「毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげて勇往邁進しよう」としるし、それを中隊に高くひるがえした。

門合同志はだんことして林彪副主席の指示を実行し、いつも二つの路線の闘争を忘れず、プロレタリア階級の政治を先行させることを忘れなかった。一九六五年十月のある晩、かれは第六中隊から送られてきた「週訓練進度表」を見ていて、政治課目がぬけているのに気づいた。かれはひじょうに心配になった。これはけっして小さなことではない、二つの建軍路線が中隊の幹部の思想に反映しているのだ、とかれはすばやく見てとった。そこで、翌日、夜があけるとすぐに進度表をつくった副中隊長と辛抱よくきめこまかに話した。その幹部は、これまで政治運動が軍事訓練の時間にくいこんだので、この週は軍事訓練に力をいれなければならぬと考えていたのだ。門合同志は、「政治と軍事のどちらが大切だろうか。もちろん政治が大切だ。政治は方向であり、魂なのだ。方向を見失い、魂を失って、兵をどこに導いていこうというのか」ときびしく指摘した。門合同志のきびしい、しかし懇切で熱情のこもった援助によって、その幹部はすぐに自分の誤りに気づいてその欠点をあらためるとともに、重要なときにいま一度自分を助けてくれた門合同志に心から感謝した。

毛主席の建軍路線をまもる激しいたたかいのなかで、またプロレタリア階級の政治を先行させるという林副主席の指示をつらぬく実践のなかで、門合同志は中隊建設について、つぎのような十カ条の要求をまとめた。毛主席著作学習の空気を濃厚にすること、プロレタリア階級としての自覚を高めること、人民に奉仕する思想を赤くきたえあげること、私心雑念をきれいにとり除くこと、階級敵にたいする憎しみを深めること、三八作風①をしつかりと育てること、革命的意気どみをもりあげること、勤務態度を端正にすること、団結を固めること、革命工作を着実にこなうこと。門合同志が、毛主席の政治を先行させる建軍の原則を堅持し、反革命修正主義分子羅瑞卿のブルジョア軍事路線を力強くしりぞけたので、かれが指導する中隊は、毛主席の建軍路線にそって堂々と前進していった。

① 「三八作風」とは、毛主席がつくりあげ、指導している中国人民解放軍が、長期にわたる苦難にみちた革命闘争のなかで、つちかわれてきた多くのすぐれた作風のこと。毛主席は、このすぐれた作風をつぎの三つの句と八つの字に概括している。すなわち、確固とした正しい政治方向、困苦欠乏にたえ、質素をむねとする工作作風、弾力性をもつ機動性にとむ戦略と戦術。団結、緊張、嚴肅、活発。略して「三八作風」という。

革命の一戦士

門合同志は、「刻苦奮闘の作風を保持しなければならない」という毛主席の偉大な教えをしつかりと心に刻み、二十年らい、戦士のときも、幹部のときも、終始「革命の一戦士」として働くプロレタリア階級の本領を保っていた。かれは刻苦奮闘し、質素につとめ、大衆としつかりと結びつき、どこへいっても中国人民解放軍の三八作風と光榮ある伝統を忘れなかった。「一生涯人民の牛となり、一生涯革命の車をひく」——これこそ偉大な共産主義の戦士門合の輝かしい一生を描いたものである。

入隊したとき、門合同志は中国人民解放軍華北軍区第一後方病院の伝令兵となったが、それからまもなく、警備兵にまわされた。かれは警備の任務をりっぱにつとめるだけでなく、自分からすすんで機関の事務室の水くみや掃除、当直などを手伝って、ひとときもからだをあそばせていなかった。同志たちがかれにやらせまいとしたが、門合同志は、「みんな仕事がいそがしいんだ。ぼくはすこしぐらい多く働いたってなんでもないよ」といった。同志たちの家族がたずねてくると、かれはいつも熱情をこめて、部屋に案内し、ふとんをはこび、水をくみ、食事

をとどけるなどして、こまかなところまで気をくばった。朝おきると、かれはまず部隊が駐屯している村人の家の庭をきれいに掃除して、水がめに水をいっぱい満たした。大衆にたいし、同志にたいして、かれはこのようにあふれるような熱誠をもって接し、ひじょうな関心をはらったが、自分のことはめったに考えなかった。当時、病院はかれの家からわずか五キロのところであり、かれも結婚したばかりだったが、一度も休暇をとって家に帰ったことがなかった。あまりに久しくなったので、部隊の同志たちはかれに、一度家に帰ってくるようになんどもすすめた。だがかれは、「ほかの同志たちは家が遠いのに帰っていない。ぼくの家は近いんだからなおさらのこと帰るべきじゃない」といった。

部隊が都市に移ってからも、門合同志はいつも自分が勤労人民の息子であることを忘れず、依然として刻苦奮闘し、質素につとめ、大衆としつかりと結びつく作風を保持した。労働のときは、いちばんきつく、よごれる仕事をやり、行軍のときは、いちばん多く銃をかついだ。戦士が病気になる、かれは自分で病人の食事をつくった。分隊にいくと、かれは戦士たちと寝床をつらねて寝た。

門合同志は第五中隊の指導員になると、いつも戦士たちに学び、大衆から精神的養分をくみ

とるよう心がけた。かれはカベ新聞の原稿を書いたらかならず戦士たちに手をいれてもらい、こうすることを戦士たちに学ぶ一つの課目とした。中隊のりっぱな人、りっぱな出来事は、どんな小さなことでもそれを見のがさずに心にとどめ、そこから教えをうけた。第五中隊に、門合同志の援助によって、ひじょうに進歩のはやい新戦士がいた。その戦士は、休みのたびに、炊事班にいつて火をたいたり、食事をつくったりするのを手伝うか、あるいは、同志たちが洗たくしたり、衣服をつくろったりするのを手伝った。また畑にいつて労働するか、あるいは大衆のために便所のくみとりをした。門合同志はその戦士から多くの貴いものを見つけ、その成長の経験をまとめて、全中隊にそれをひろめた。かれは、「兄弟単位の英雄的な出来事、模範的な出来事を学ぶことはひじょうに大切だ。だが、われわれの目のまえのりっぱな人、りっぱな出来事もよく学ばなければならぬ。たとえ、この新戦士にはわれわれみんなが学ぶべきだ。わたしはまず指導員という荷をおろして虚心にかれに学ぶべきだと思ふ」とはつきりいつた。門合同志の話すひと言ひと言に、大衆の小学生になろうとするかれの誠実な気持ちがあふれていた。日曜日になると、門合同志はズボンをまくり、クワをもち、その戦士のあとについて、便所のくみとりにでかけた。かれの影響で、幹部と戦士のあいだに、追いつき追いつき、

すすんだものに学ぶ空気が急速にうまれてきた。

ある日、門合同志は第五中隊の駐在地から連隊本部に会議にでかけたが、途中でどしゃぶりの大雨にあい、服も靴もびしょぬれになった。だが、時間どおり目的地につくために、門合同志は五十キロ以上の道のりを歩きつづけ、夕方、泥まみれになって、第六中隊の狩猟隊にいつた。同志たちは心からかれをもてなしてくれ、着がえや洗面用水を運び、寝床を用意してくれた。狩猟隊の分隊長は炊事員に、「はやく、指導員に飯をたき、野羊の肉をやいてあげてくれ」とせかせるようにいつた。門合同志はあわててそれをこわった。「かまわないでくれたまえ。わたしは弁当をもってきたから」そういつて、かれはカバンから冷えた饅頭ふたつと漬物を取り出し、白湯をのみながらそれをたべはじめた。そして、夜、分隊の戦士たちが寝静まったあとも、門合同志は疲れを知らぬかのように黙々と「老三篇」の学習にとりくんだ。翌朝、戦士たちが朝の光をあびながら練兵場に出ると、門合同志が歩哨に立っていた。みんなは、「門合同志は第五中隊の指導員なのに、第六中隊にきて一戦士になっている。行軍で疲れていながら、休まずわれわれのために歩哨に立ってくれた。門合同志はほんとうに、われわれが学ぶべきりっぱな手本だ」と声をそろえて称賛した。

門合同志は、中隊では愛兵の模範であり、地方で仕事をしたときは大衆とすっかりと結びつく愛民の模範だった。一九六六年、かれは互助土族自治県のある山村の社会主義教育運動に参加したが、いつも階級的兄弟の難儀に関心をよせていた。高原にまもなく雨季がおとずれようとしていたとき、門合同志は二戸の老貧農の家がいまにも倒れそうになっているのを見つけた。

かれはすぐに貧農・下層中農協会の委員たちを組織して、「老三篇」、「大衆の生活に関心をよせ、活動方法に注意せよ」などの輝かしい著作を学習し、社員たちをこの老貧農の家の修理の義務労働に動員した。門合同志は腕をまくり、先頭にたって働いた。こうしたかれの姿を見て、大隊のほとんどの社員がこの義務労働に参加し、わずか六日間で、八間の新しい部屋ができあがった。六十をすぎた老貧農の樊おばあさんは、ふるえる手で新しい部屋のカベをさすりながら、「こんどこそ『老三篇』の精神がわかった。ひたすら革命のためにつくし、貧農・下層中農のためにつくす、これが『老三篇』だ。この新しい部屋は『老三篇』だ。門合同志は『老三篇』だ」と感動していった。

門合同志の刻苦奮闘し、質素につとめるすぐれた作風とあまんじて革命の一戦士としてつとめるその徹底した革命的精神には、貧農・下層中農も深く感動させられた。

門合同志は革命に参加して二十年、めったに帰省しなかった。数年ぶりに帰省しても、かれは色があせつぎのあたった軍服を着、ふるい解放軍の布靴をはいて、貧農・下層中農といっしょに労働し、学習し、語りあった。大衆の考えていることを考え、大衆のいそいでいることをいそいだ。かれは熱情をこめて、社員たちが毛主席の著作を学習し、農村の階級闘争の情勢を分析するのを援助し、生産隊が生産の安排をするのを援助した。また生活に困難のある貧農・下層中農にたいして、たきぎひろい、水くみ、庭掃除などを手伝ったばかりでなく、また、自分の家の食糧をとどけてあげた。

村の人たちはひさしぶりに会うので、いろいろとたずねたが、部隊でなにをしているのかと大きくと、かれはいつも、「一兵士として、革命のために働いています」と笑いながら答えた。

「おじさんよりあとにはいった人が幹部になっているのに、おじさんはどうしてまだ兵士なの？」と物好きな子供が聞くと、「おじさんが解放軍の兵士になったのは、国民党反動派をうち倒し、毛主席をまもるためだよ。敵はいまでも負けたことに甘んじていない。毛主席をまもる任務も変わっていないのだ。おじさんがいまも兵士であるのは、光栄なことだろう」とかれは答えた。村の人たちの多くは、かれが犠牲になるまで、部隊でなにをしているか知らなかつ

た。

かれはたえず村の青年たちに政治的警戒心を高めるように教え、「地主、富農はうわべは『おとなし』そうにみせかけているが、それにだまされず、監視をつよめなければならぬ」といった。また、「たべたり着たりすることはけっして小さなことではない。よいものを着、うまいものをたべてばかりいたら、いつかはかならず勤労人民から離れ、革命を忘れてしまうだろう」といしめた。

門合同志は一貫して、集団の生産労働に参加することは、大衆と緊密に結びつき、いつまでも勤労人民の本領を保つ重要な一環であると考えており、帰省している間でさえ、いつも社員たちといっしょに労働し、語りあった。

一九六一年の秋、取り入れた作物が脱穀場にもちこまれたばかりのころ、門合同志は青海高原から郷里に帰ってきた。帰省した翌朝、かれはさっそく社員にまじって脱穀場ではたらいだ。門合同志が胃病をわずらっていることを知っている父は、長旅の疲れもあることだし、二日ほどゆっくり休むようにとかれにすすめた。だが、かれは「解放前いっしょに物乞いをして回った貧農や下層中農の人たちといっしょに多くはたらくと、階級の苦しみを忘れないですむ

からね」といった。社員たちも親切に、「門さん、せっかく帰ってきたんだから、よく休んで、家の整理でも手伝ったらどうだ」とすすめるたびに、「毛主席は『われわれ共産主義者は役人になるのではなくて、革命をやるのである』と教えておられる。労働は貧農・下層中農の本領だ。労働から離れば、大衆から離れ、革命から離れて、修正主義になってしまう」とほがらかに答えた。

ある日、門合同志は胃が痛みました。ちょうどそのとき、空模様が急に変わり、黒雲がひろがり、雷がなりだして、いまにも大雨がきそうになった。門合同志はトウモロコシを干してあるのを思いだして、いそいで広場にかけて、社員たちといっしょにしまいこんだ。みんなかれが胃の痛いのを知ってなんどもかえって休むようにとすすめたが、かれは、「だいじょうぶ、食糧をしまう方が大切だ」といって、痛みをこらえ、最後までがんばった。社員たちはひじょうに感動し、「門さんはほんとにわしら貧農・下層中農の仲間だ」とかれをたたえた。

英雄は毛主席を熱愛し、毛沢東思想は英雄をはぐくむ

門合同志が二つの路線の闘争にたいして高い自覚をもち、勇敢に逆風にたちむかい、荒波と

たかうことができたのは、終生階級の苦しみを忘れず、毛主席を限りなく熱愛し、毛主席と毛沢東思想にたいして、自覚的に、徹底的に忠誠をつくしたからであり、あくまで毛主席の著作を活学活用し、偉大な毛沢東思想で自分の頭を武装したからである。英雄門合は毛沢東思想の陽光と雨露にはぐくみ育てられたのである。

「毛主席の恩は天地よりも大きく、毛主席がいなかったら、こんにちの門合はありえない。毛主席がいなかったら、天下の勤労人民の解放はありえない」毛主席にたいする門合同志の熱愛は、山よりも高く、海よりも深かった。

門合同志は苦しみをなめて育った貧乏な家の子であった。一九二八年の冬、河北省涿源県の山間地帯では、砂まじりの北西の風が吹きすさび、天も地もまっ暗になっていた。門合同志は生まれるなり旧社会の飢えと寒さにさいなまれた。飢えのため一滴の乳も出ない母親は、乳のみ子をおいて、風や雪のなかを物乞いに歩いた。門合は野げしを食べて日をおくり、八才になると、父親について地主のところへ牛馬のようにはたらいた。一九四〇年は水害で収獲がなかった。腹黒い地主は情容赦なく父と子を屋敷の外にほうり出してしまった。飢えと寒さのなかで、父母は悲しみをこらえて弟と妹を他人に売りわたした。一家が別れ別れになるとき、弟は

母親にしがみついで、「かあさん、ぼくはひもじくないよ、ぼくどこへもゆかないよ」と泣き叫んだ。妹も門合の手をつかんで、「にいさん、わたしはにいさんといっしょに野げしをどりにゆく」と泣きじゃくった。朝夕いっしょに暮らしてきた血を分けた兄弟がはなればなれになるのだ。それとひきかえに受けとったのはわずか四升のトウモロコシと四升のコウリヤンだった。十二才の門合は目をまっ赤に泣きはらした。その後、一家は飢きんをのがれるため、やむなく父母について故郷をあとにした。

一九四一年、門合同志の一家は宣化にのがれた。父親は日本侵略者が支配していた鉢山ではたらいだ。その後、党の指導のもとに、毛沢東思想にみちびかれて、父親はすすんで革命活動にくわわり、階級敵とたたかった。幼い門合もこのころ、苦難にあえぐ人びとの救いの星が毛主席であること、貧しい人びとを指導して解放のためにたたかう偉大な指導者が毛主席であることを知りはじめた。そのときから、かれは毛主席にしたがって革命をやるようになった。かれはいつもほだして、麻袋をまとい、危険をおかして、党のために勇敢に手紙や情報を送りとどけた。

階級の憎しみ、民族の恨みは、門合同志に、解放をかちとるには鉄砲をもち、毛主席にした

がって革命をやらなければならない、という真理を教えた。一九四六年、門合同志の一家は解放された涑源にもどってきた。その翌年、十九才の門合同志はあらゆる土地改革運動に参加した。

階級の苦しみ、民族の血と涙に満ちた門合同志は、この鋭くはげしい階級の大格闘のなかで、敵陣に突撃する勇敢な戦士となって、たたかいの最前線に立った。

ある晩、貧農団が旧社会の罪悪を糾弾する大会を開いた。門合同志の父は、自分たちを残酷に搾取し、抑圧して、子供を売り家をつぶさなければならぬ破目においやった村の地主李清華の極悪非道の罪を訴えた。このとき、会場の一人が、「犬をひつつかまえろ！」とさげんだ。十九才の門合同志は立ちあがって、「みんな、地主のところへいってけりをつけるんだ」と大声でいった。この声をあいつに、人びとはいっせいに地主の家に押しかけ、李清華をひきずり出した。門合同志は怒りをこめて、その頭を指さしていった。「どれほど多くの人たちがぼくの父さんのように、おまえに牛や馬のようにこきつかわれたか。しまいには逆に、借金を返せとせまられ、夜逃げをして乞食になり、家をつぶしたか。おまえの血の債務はいまかえしてやるぞ！」

「悪覇地主を打倒せよ！」

階級闘争の激流は地主・悪覇の昔の威风を徹底的にたたきつぶし、南上屯村の土地改革運動は輝かしい勝利をかちとった。

土地改革のはげしい階級闘争にきたえぬかれた門合同志は、光栄にも中国共産党に入党した。

さらに、全中国を解放し、苦しみにあえぐ階級的兄弟を救うため、門合同志は毛主席の偉大な呼びかけに熱烈にこたえて、一九四八年十月、中国人民解放軍に参加した。入隊してから、かれはよく家に手紙を書いて、階級の苦しみを忘れず、毛主席の教えにしたがって、だんことして毛主席のさし示す道を歩むよう、家の人たちに教えた。

二十余年間、門合同志はこのうえなく深いプロレタリア階級の感情を胸にいだいて、毛主席を限りなく熱愛してきた。かれの子供が片言をしゃべりはじめると、かれは「おとうさん」や「おかあさん」ということばを教えないで、まず「毛主席万歳！」ということばを教えた。妹が新調の綿入れを着ると、かれは「解放されたのは毛主席のおかげだ。いつまでも毛主席のことを忘れてはならない」とくりかえしいってきかせた。また、新しい戦士が中隊に着くたび

に、かれはまず『人民に奉仕する』を話し、「毛主席のりっぱな戦士になる」ことを要求した。門合同志は毛主席著作の活学活用を生きるうえで第一に必要なものと考えていた。かれはいつも、「毛主席の著作を学ぶか学ばないかは、革命の立場の問題であり、革命の意志の問題であり、革命の方向の問題である」といつていた。かれは、たとえ食べなくても、また寝なくても、毛主席著作の学習をやめることはできなかった。夜、戦士たちがすでに寝てしまっても、門合同志のテントにはいつも明かりがともっていた。かれは小さなランプの下で、毛主席の著作をうむことなく学んだ。風雪のあれくるう厳冬であろうと、炎熱の真夏であろうと、戦闘のさなかにある中隊のなかであろうと、中隊から遠くはなれた出張の途中であろうと、かれはむさぼるように毛主席の著作を学んだ。教育程度が低くても、なんとか困難を克服し、仕事が忙しくても、なんとか学習時間をつくり出した。

一九六〇年の冬、中隊がある草原に駐屯したばかりのとき、まだ一重のテントをつかっていたが、零下三十度以上になる深夜、門合同志はいつもインクびんでつくったランプをわきにおいて、ノートをとったり辞書をひいたりしながら、毛主席の宝の書の学習にとりくんだ。ペン先が凍ると息をふきかけて書きつづけた。口から吐きだされる息はたちまち毛に霜のようにびっしりと凍りついた。手がかじかむといらなくなった紙をもやしてあぶり、足がこごえること立ちあがって歩いた。ときには立ちあがろうとするとよろけて地にひっくりかえることもあった。胃が痛みだしても学習はやめず、かまどからあつくなった石をもってきて布にくるみ、腹をあたたためた。灯油がなくなると懐中電灯をつかい、電池がなくなると足音をしのばせて炊事場にいき、かまどのわきにしゃがんで灰をかきまわし、のこり火のかすかな明かりで毛主席の宝の書をむさぼるように学んだ。かれは疲れも眠りもまったく感じなかった。

ある夏、夜ふけに大隊から第五中隊にかけつけた門合同志は、同志たちが寝ているのを見て、そっとあいているベッドに上がった。当直の責任者が巡回にまわってきて、一人ふえているのに気づいた。ふとんを頭から足まで包んでいる。当直の責任者は、暑いのにこんなかっこうをしているが、だれか急に病気にでもなったのではないか、そう思って、ふとんをそつとまわってみてびっくりした。門合同志が懐中電灯を手にして、毛主席の輝かしい著作『延安の文学・芸術座談会における講話』をむさぼるように学習していたのである。当時、文学・芸術界では妖怪変化がつきつきとび出してきたので、門合同志はイデオロギー戦場で、封建主義、資本主義、修正主義の文学・芸術に猛攻撃をくわえる準備をしていたのだ。あまり学習に集中

していたので、暑さも忘れ、ひたいには大つぶの汗が流れ、枕までぐっしりぬれていた。

一九六七年九月四日の深夜、名譽の犠牲となる前日、門合同志はいつものように黙々と毛主席の著作を学び、いま一度「老三篇」を鏡にして自分の思想と照らした。そしてかれは、「張思徳のように生涯人民に誠心誠意奉仕し、人民のために生き、革命のために死ななければならぬ。りっぱな成果をもって、毛主席の輝かしい著作『人民に奉仕する』の発表二十三周年を迎えよう。……」という、かれの生涯最後の毛主席著作を活学活用した一段の輝かしい文字をしたためた。

「毛主席の著作は毎日学ばなければならない。一日学ばなければ問題が多くなり、二日学ばなければ下り坂をころげおち、三日学ばなければ生きてゆけない」これこそ門合同志が長い間の経験から得た、心からのことばである。

「毛主席の著作は、学んだらすぐに用いなければならない。学んで用いなければ、田畑を耕して種をまかないのと同じだ」門合同志は毛沢東思想で自分を改造することを片時も忘れなかった。かれは、「世界観が変わるといふことは根本的な転換である」という毛主席の教えをしっかりと胸に刻みつけ、意識的に私心をうち破って公の精神をうち立て、世界観を改造し

た。かれはいつも、「革命者は革命闘争のなかで鍛えられ、成長するのだ。『自来紅』（自然に共産主義の思想が身につけている）などというものはなく、『自覚紅』（自覚的に世界観を改造して、共産主義の思想を身につける）があるだけだ」といつていた。かれはすすんで私心に攻撃をかけ、私心が頭をもたげるとすぐさま減戦をおこなう。同志たちは、門合同志はちりほどの私心雑念もみのがさぬ人だといっていた。

門合同志はつねに自分にきびしく要求し、自分からすすんで大衆の批判と監督をうけた。一九六六年、かれは青海省互助県の山城生産大隊の社会主義教育運動に参加したが、そのとき、ふだんの部隊生活のすぐれた伝統的な作風をこの生産大隊にもっていった。かれは成果があがってもすこしもおごらず、いつも他の工作隊の隊員といっしょに貧農・下層中農や革命的大衆のところへ行って意見を聞き、すすんでかれらの監督をうけた。仕事が一段落したあるとき、同志の一人から大衆は自分たちの仕事になにも意見をもっていないと聞いて、門合同志はじょうに心配になった。かれはすぐに工作隊の隊員たちを組織し、問題をもって毛主席の著作を学び、みんなに幹部という荷をおろして大衆の小学生にならなければならないといった。同時に、貧農・下層中農協会の委員と積極分子を組織して、批判と自己批判、自由主義に反対する

などについての毛主席の論述を学び、「わたしたちの欠点や誤りにたいして、あなたたちが批判もせず援助もしてくれないならば、それはほんとうにわたしたちを愛護してくれることではないし、毛主席の教えにもあっていない」とくりかえしはげました。門合同志に心からそういわれて、社員たちはすっかり気づかひもなく、思っていることを卒直に話してくれた。それはすべての幹部、仕事にとって大きな教育となり援助となった。人びとは、「門さんはひたすら革命につくしている。人民と党の事業にたいしてほんとうに極度の責任をもって」といった。

プロレタリア文化大革命のなかで、かれは革命の原動力となって、左派の広範な大衆を確固として支持するとともに、革命の対象となって、頭のなかの私心と思いきりたたかい、世界観の改造をおこなった。かれはこういつていた。「私心をうち破ってはじめて、確固として毛主席の革命路線にしたがって事をはこぶことができる。私心をうち破ってはじめて、左派を熱愛し、いっそう確固として左派を支持することができる。私心をうち破ってはじめて、ブルジョア階級の派閥性を克服し、プロレタリア階級の党性を強化することができる」

英雄は毛主席を熱愛し、毛沢東思想は英雄をはぐくむ。英雄門合の全身には、毛沢東思想の

光がさんぜんと輝いている。砲火のはげしい戦争の時代に、かれは勇敢に戦った。社会主義革命と社会主義建設の事業のなかで、かれは困難をおそれず、積極的に活動し、「五好幹部」の光栄ある称号をうけた。かれの目はもっともたしかで、かれの心はもっとも赤く、かれの階級的な愛憎はもっともはっきりしていた。かれは階級の苦しみをしっかりと胸に刻みつけ、血と涙の恨みを忘れず、苦難にあえぐ世界の階級的兄弟を忘れなかった。かれは真に、

人民のために生き、人民のために死に、

毛主席にしたがって生涯革命をおこなったのだ。

〈門合同志をしのぶ〉

偉大な指導者毛主席に

はぐくまれたりっぱな戦士

門合同志の父 門進忠

わたしの原籍は河北省の唐県です。解放まえは、そこで地主の作男や、臨時雇いをして一年中働きましたが、それでも食うや食わずのありさまでした。その後、飢きんにみまわれたので、一家で涿源県にのがれ、南上屯村に住みつきました。

一九二八年、旧歴の十一月四日、ドロづくりのあばら家で門合が生まれました。冷たい風が破れたマドやカベのすき間からヒューヒューと吹きこみ、家内は、家にたった一枚しかないボロぶとんにくるまって、寒さにふるえています。門合が生まれても、家には米ひとつぶない

ので、家内は寝てもいられず、かごをさげて、骨を刺す寒風のなかを一軒、一軒物乞いに歩きました。門合は生まれたその日から、一家のものと同じように、野げしを食べて命をつなぎ、糧食を食べるのは一年のうち半年だけで、あとの半年はぬかと野げしですごすという苦しい暮らしをしました。八つになると、わたしについて地主のところで働くようになりました。

一九四〇年、涑源では四十日も大雨が降りつづいたため、ひとつぶの食糧もとれませんでした。鬼のような地主は作男をこれ以上しほしてもなにも出ないと見て、わたしたちを追いだしました。

野げしさえたやすく見つからない当時のことです。一家はどうして生きていけばよいでしょう。わたしと家内は、涙をこらえて門合の九つになる弟と三つになる妹を売り、わずか四升のトウモロコシと四升のコウリヤンを手にいれて、急場をしのぎました。

一ヵ月ほどたちましたが、困難はますますばかりです。売った二人の子供は、さんざん痛めつけられて、泣きながら家に逃げ帰ってきました。わたしと家内は、やせて骨と皮ばかりになった子供たちをみて、声をあげて泣きました。どうにも生きる道がありません。「よそへ行こう！」わたしは腹をきめ、ポロぶとんを背負い、破れかごをさげ、五人の子供をつれて、他郷へのが

れて暮らしをたてることにしました。ちょうど門合が十二になったときのことでした。

一九四一年の春、わたしたち一家は宣化県に落ちつきました。そこで、わたしは地下の党と連絡がつき、知人の紹介で日本人が支配していた竜煙鉄鉱山で働くことになり、階級敵と生死をかけた闘いをすすめました。そのころ、幼い門合は、貧乏人を指導して革命をおこなっているのが偉大な指導者毛主席であることを、知るようになりました。そのときから、門合は毛主席をひじょうに熱愛し、毛主席のあとについて革命をやる決意を固めたのです。門合はいつも地下の党組織のために手紙や情報を送りとどけていました。ある日、日がすっかり落ちてから、一通の手紙を十何キロはなれた井子会村へ至急とどけねばならなくなりました。わたしは危険があつてはと心配して、せがれをいかせまいとしました。ところがせがれは、「父さんがいけるなら、ぼくにだっていける。ぼくは子供だから、父さんより都合がよい」といつてきません。この仕事はたいへん危い、しくじったら首がとぶ、といつてきかせても、「父さんが死ぬのをなんとも思っていないのなら、ぼくだって平気だ」といいます。ちょうど冬です。門合がはいっていたボロ靴は、村を出ていくらもちかないうちに、片方がだめになってしまいました。両足はこごえて赤くはれあがり、石ころやいばらで血だらけになりました。夜が更けて

家に帰ってきたとき、足の痛みがひどいのじゃないかと、わたしがたずねると、せがれは笑いながら、「貧乏人のためにやっているのだ。もっと苦しくても、もっと痛んでも平気だよ」と答えました。

一九四六年、蒋介石匪賊が宣化を占領したので、わたしたち一家は地下の党の配慮で、すでに解放されていた涿源にもどりました。郷里に落ちつくとすぐに、せがれは村にいた人民解放軍のところに出かけて、毛主席の肖像画を一枚もらい、大よろこびでもどってきました。門合は毛主席の肖像画を手にも、まるで長く別れていた肉親に会ったかのように、近寄ってじっと見っていました。そして、それをきちんとカベにはり、一日に何回もながめていました。やがて青年の革命組織にはいった門合は、ひじょうにはりきって、青年たちをひきいて歩哨に立ち、敵を監視し、小作料と利子のひきさげ闘争にすすんで参加しました。一九四七年の夏、村では、土地改革運動があらしのようにくりひろげられました。そのとき門合の立場はいちばんしっかりしていました。地主と闘争するとき、せがれはまっ先に演壇にのぼり、地主の罪状を告発し、率先して、「毛主席万歳！」のスローガンを声高く叫びました。地主がなにか陰謀活動をやると、せがれはいつもそれをすばやく摘発しました。村の人たちは、「門合は年は若い

が、なかなか大きなことをやる」とほめていました。この年、せがれは光栄にも中国共産党にはいりました。

毛主席と共産党の教えをうけて、門合のプロレタリア階級の自覚は日をおって高まりました。入党後まもなく、こんどは解放軍に入隊することを待ちのぞんでいました。そして、いつも、「毛主席、共産党のおかげで、ぼくら貧乏人は解放されたのだ。ぼくは解放軍にはいって敵をやっつけるのだ」といっていました。せがれは毎日のように入隊のことを考え、解放軍にはいって前線へ出かけ、敵をやっつけることを夢にまで見ていました。ある日、野良で働いていた門合は解放軍の部隊が新しい戦士を入隊させるという知らせを聞きつけて、さっそく申込みに出かけました。入隊が許されると、わたしが納得しないのではないかと心配して、「ぼくらの勝利の果実をまもり、世界じゅうの貧乏人がみな解放されるようにするために、ぼくら貧乏人は率先して解放軍にはいらなきゃならないんだ」とわたしに働きかけました。わたしはそのとき、「おまえはおとつあんを見くびっている。いってこい。いくのがあたりまえじゃ」といってやりました。その後、わたしは家内とよるこんでせがれを毛主席の隊伍におくりとどけました。

門合が入隊してから、わたしは三度部隊にいつて会いましたが、そのたびに、せがれは進歩しており、革命の道理をいっそう多くわきまえるようになっていました。せがれはいつもわたしに、階級の苦しみを忘れてはならない、階級闘争を忘れてはならない、毛主席のことを聞いて、社会主義の道を歩まなければならない、と教え、「暮らし向きがよくなったからといって、毛主席のことを忘れたり、共産党のことを忘れたり、旧社会の苦しみを忘れたりしてはいけない」といつていました。また、敵味方をはっきり区別するようわたしに教え、「貧農・下層中農はみな兄弟だ。地主がどんなにきれいごとを並べようと、ぼくらのかたきだ。やつらを厳重に監視しなければいけない」といつていました。農業生産協同組合ができると、せがれは、「ぼくらは貧農だ。貧農はかならず毛主席のことを聞いて、集団化の道を歩まなければならない。これは毛主席がぼくら貧乏人にさし示した広びろとした道なのだ」といつていました。門合のいうことは、わたしの思っていることとびつたりでした。だから、協同組合ができたくも、人民公社ができたくも、わたしは率先して加入しました。

一九六一年、涇源県の党内のひとにぎりの資本主義の道を歩む実権派は、劉少奇の「三自一包」の悪だくみにしたがって、「困難をのりきるには、公社員はどうしても小面積の荒地地

を開くしなければならぬ」などとさかんにわめきたて、全县に邪悪な空気を流しました。この年の秋、帰省した門合はこのありさまをみて、すぐに、これは社会主義の道を歩むのか、それとも資本主義の道を歩むのかのきびしい階級闘争だ、と気づきました。そこで、家じゅうのものを集めて、ひじょうに厳肅な態度でいつていました。「小面積の荒地地を開くということとは、けつして小さな問題ではない。それは資本主義の道を歩むことだ。もし公社員が自分のことだけをやつて、集団の生産に無関心ならば、人民公社はどうしてうち固めることができるのか。こんな調子でやつてゆけば、だんだんと単独経営がはびこり、貧しいものはますます貧しくなり、富んだものはますます富むようになって、人間が人間を食うふるい社会にもどつてしまう」ここまで話すと、門合はまた旧社会で飢きんのため物乞いに歩いたこと、子供を売つたことなど苦しみにみちた家の歴史をとりあげて、わたしたちを教育しました。「ぼくら貧農・下層中農はいましあわせだからといつて、昔の苦しみを忘れてはならない。地主や富農をもう一度ぼくらの頭上でのさばらせ、勝手にふるまわせてはならない。かならず毛主席のことを聞き、率先して集団生産をりつぱにやり、率先して社会主義の道を歩まなければならない」といつていました。部隊にもどつてからも、まだ安心できなかったらしく、わざわざわたしに

手紙をよこして、血と涙の恨みを忘れず、階級の苦しみをしっかりと胸に刻み、資本主義復活のよこしまな風をあくまでくいとめるようにといってきました。

せがれは、英雄的なさいごをとげました。その知らせを受けたとき、わたしは耐えがたい思いでした。だが、せがれが勤労人民のりっぱな息子であり、毛主席にはぐくまれたりっぱな戦士であったことを思うと、わたしは大きな誇りを覚えました。毛主席はわたしたちに、「革命に殉じた何千何万の戦士たちは、人民の利益のために、われわれに先だって英雄的に身を犠牲にしたのである。われわれは高だかとかれらの旗をかかげ、かれらの血の跡をふんで前進しよう」と教えています。わたしは、ことし六十八になります。年をとればとるほど、ますます革命をりっぱにやらなければなりません。わたしは、毛主席の著作を読み、毛主席の教えにしたがい、毛主席の指示どおりに仕事をし、せがれと同じように、毛主席のさし示す光明にみちた大道を歩み、しっかりと毛主席につきしたがって、農村での二つの道の闘争をあくまでやりぬき、プロレタリア文化大革命を最後までやりぬく決意です。

夫はひたすら毛主席に思いをはせていた

門合同志の妻 張鳳英

夫はわたしたちのもとを永遠に去ってしまいました。夫がなくなってからというもの、なにかにつけて夫の生前のかずかずの感動的なおこないが思い出され、偉大に生き、光榮に死んだ夫はほんとうに毛主席にはぐくまれたりっぱな幹部であり、貧農・下層中農のりっぱな後継ぎだったとしみじみ感じています。

結婚してから十数年のあいだ、夫は多くのことを教えてくれ、助けてくれました。なかでも、いちばん印象が深くいちばん忘れられないことは、夫がなにをやるにも毛主席のことを思い、ひたすら毛主席に思いをはせていたということです。

一九四八年十月、わたしたちが結婚してから四ヵ月たつたたないときに、夫は志願して中国人民解放軍に入隊しました。そのとき、夫の母は入隊にあまり賛成ではありませんでした。

わたしもいくぶん気がかりでした。夫は、「鳳英、ぼくらは苦しみをなめて育ち、血のにじむような過去をもっている。いまは解放されてしあわせな日を送っている。命の恩人である毛主席のことを忘れてはいかん。世界には、まだ解放されていない貧しい兄弟たちがたくさんいるということを忘れてはならない」と辛抱づよくわたしに話してくれました。こうして、夫はわたしを説きふせ、母親を説きふせて、よろこび勇んで人民解放軍に入隊したのです。

入隊してからも、夫はいつも手紙で、階級の苦しみを忘れぬように、毛主席のことをよく聞いて、毛主席のさし示す道をあくまで歩むようにと、わたしたちに教えました。

一九六一年に青海省にうつり夫といっしょに暮らすようになってからは、夫がどんなに毛主席を愛しているかをもっとよく知ることができました。夫は中隊から家へ帰ってくるたびに、家じゅうのものをあつめて毛主席の語録を学びました。子供たちがまだとうさんやかあさんと書えないところから、夫は毛主席の肖像を子供に見せ、「毛主席万歳！」ということばを教えました。ある日、夫は五つになる青倉を抱いて毛主席の肖像を見せながら、「青倉、毛主席はとうさんやかあさんよりも親しい人だよ。毛主席はうちの者にとって、だれよりもいちばん親しい身内の人なんだよ。おまえはいつまでも毛主席のことを忘れてはならないよ」と教えて

いました。ある日、夫は毛主席の肖像を一枚買って帰り、額縁のなかの自分と子供たちの写真を毛主席の肖像にとりかえました。夫は、感動したように「これでよい。頭をあげて毛主席をおおぐと、革命の底力がわいてくる」といいました。

夫は中隊から家にもどるのが早くても遅くても、かならず毛主席の著作を学んでいました。教育程度が低くて困難も多かったのですが、学習にはとても真剣に努力していました。わたしがひと眠りしても、夫はまだランプのもとで毛主席の著作を学んでいることがありました。夫はよく「睡眠をへらしてもかまわないが、毛主席の著作の学習は絶対にやめてはならない」といっていました。

夫は自分で毛主席の著作の学習に努力するだけでなく、わたしや子供たちにも毛主席著作の活学活用をひじょうにきびしく要求しました。わたしが青海省にくるとすぐに夫は毛主席の著作を学ぶようにといました。そのころわたしは自分の名前さえ読むことができないもんだから、学習しだすと困難が山のようにありました。夫は一字一句読み方を教えてくれ、意味をくりかえし説明して、困難をのりこえて学習をつづけるようにとはげましてくれました。「毛主席の著作はもっぱらぼくたち貧乏人のために書かれたものだ。そこに書かれているのはみな革命

の道理で、深いプロレタリア階級の感情さえあれば、かならず学びとることができる」と夫は
いっていました。あるとき夫から毛主席の語録をひとつ暗唱するようにいわれて暗唱できな
かったことがあります。夫は腹をたて、「おまえは貧農という自分の出身階級を忘れているか
ら、毛主席のことを覚えられないのだ」といって、小琴に暗唱させました。小琴が暗唱する
と、夫はとてもよろこんで、「小琴は毛主席のことをよく聞く。毛主席のりっぱな子供だ」
とほめました。いまでも、こうした事を思い出すたびに、わたしは強く励まされる思いです。
わたしも子供たちも毛主席の著作の活学活用にいっそう努力し、どんなにいそがしくても学習
をつづけました。いま、わたしは「老三篇」のほか十いくつの語録を暗記できます。上の娘の
小琴は「老三篇」と六十いくつの語録を暗記しており、また、なにをするにも父に見ならって
います。しばらくまえ、小琴は学校の学習班で、毛主席著作学習の積極分子にえらばれまし
た。こうしたことを見ると、わたしはなんともいえぬよろこびで胸がいっぱいです。夫が生
きていたらやはりよろこんだことでしょう。

夫は永遠にわたしたちのもとを去ってしまいました。しかし、毛主席を限りなく熱愛し、
毛主席に限りなく忠誠をつくした夫のけだかい品性は、いつまでもわたしたちを教えみちびい

ています。わたしは悲しみを力にかえ、毛主席の著作をよりよく活学活用し、夫と同じよう
に、すべて毛主席のことに思いをはせ、すべて毛主席に服従し、すべて毛主席にしたがい、す
べて毛主席のためにつくそうと決意しています。また、子供たちにも父の遺志をしっかりと受け
つがせて、プロレタリア革命事業のりっぱな後継ぎになるよう教育してゆくつもりです。

「毛沢東思想に合わない
ものには、わたしは反対する！」

門合同志の戦友
某部隊連隊長

古士秀

われわれの偉大な指導者毛主席とその親密な戦友林彪副主席は、中国共産党中央委員会、同軍事委員会、同文化革命小組が「毛主席の革命路線に限りなく忠誠をつくしたりっぱな幹部」という光栄ある称号を門合同志に追贈する命令を出すことをみずから批准し、全党、全軍、全国人民のために輝かしい手本をうち立てた。わたしは門合同志の戦友として、ひじょうな光栄と誇りを感じている。

門合同志と知りあったのは、一九五四年に軍事政治幹部学校で学んでいたときだった。その後、一九五六年から一九五八年まで、かれはわれわれの部隊の小隊長をしていた。それから十年の年月がすぎたが、党に、人民に、毛主席に限りなく忠誠をつくし、命をかけて毛主席の革

命路線をまもった門合同志の英雄的なおこないのかずかずは、いまもわたしの脳裏に深く刻みこまれている。わたしたちがいっしょにいたとき、門合同志は、軍をのっとり党に反対する大野心家彭徳懐がおしすすめたブルジョア軍事路線とのきびしいたたかい、農業の社会主義的改造のきびしいたたかい、ブルジョア右派分子の党にたいする気違いじみた攻撃に反撃をくわえるきびしいたたかい、反革命分子爾清のきびしいたたかい、右翼日和見主義とのきびしいたたかいを経験した。これらの二つの階級、二つの道、二つの路線のきびしいたたかいのなかで、門合同志は終始ゆるぐことなく毛主席のプロレタリア革命路線の側に立って、毛主席の革命路線を勇敢にまもった。

反革命修正主義分子彭徳懐が「正規化」、「一長官制」、「軍隊の階級制」などといった一連の修正主義の害毒を流したとき、門合同志は毛主席の建軍路線にまったく反したこれらのしるものに強く反対し、それをだんこととしてしりぞけた。十一年まえ、部隊が野外演習をおこなったときにうつした記念写真がいまでものこっているが、その写真を見ると、他の同志たちはみな肩章をつけているのに、門合同志だけはそれをつけていない。いまでも覚えているが、そのとき、ある人が「なぜ肩章をつけないのか」とたずねると、かれは「赤軍、八路軍の光榮ある

伝統に学ばなければならない、と毛主席はわれわれに教えている。ところが、いまは、こんなばかげたことをやって、官兵一致という赤軍や八路軍の伝統をすっかり台なしにしている」と答えた。

この貴重な写真は、門合同志がブルジョア軍事路線をはねつけ、毛主席のプロレタリア建軍路線をまもった歴史的な証拠である。そのころ、労働に出かけるたびに、門合同志はいつも肩章をはずしてポケットにつっこんでいた。ある人がかれのことを「ゲリラ気質」だといって批判したが、かれは、「こんなつまらぬものを肩につけていると、物をかつぐことも、になうこともできない。これでは大衆から浮きあがらないはずがない」ときっぱりといった。門合同志は、私心のない、何ものもおおそれぬ英雄的気概をもって、逆風をつき、荒波とたたかい、だんこととして毛主席のプロレタリア建軍路線をまもり、プロレタリア階級の政治を先行させる道を確固として歩んだ。これにわれわれはひじょうに教えられた。

鋭くはげしい二つの路線のたたかいのなかで、どんなに大きな圧力をかけられ、どんなに大きな阻止力に出あい、またどんなに大きな危険にさらされようと、門合同志はいつもびくともせず勇敢に毛主席の革命路線の側に立った。一九五七年、門合同志はブルジョア軍事路線をは

ねつけ、それに反対したために、ある人からいくつかのレッテルをはられたことがあった。そのとき、門合同志は、「どんなことがあるかと、毛沢東思想に合わないものには、わたしは反対するのだ。たとえ免職させられ、家にかえってブタを飼うようになっても、わたしは毛主席にしたがって、一生涯革命をやりぬく」と確固としていった。

門合同志が終始一貫して毛主席の革命路線を堅持し、まもりぬくことができたのは、毛沢東思想にはぐくまれたからである。門合同志はブルジョア階級と修正主義の黒いしろものにもっとも深い階級的な憎しみを持ち、偉大な指導者毛主席、無敵の毛沢東思想、毛主席のプロレタリア革命路線をもっとも熱愛し、それにもっとも深いプロレタリア階級の感情をよせていた。門合同志は毛主席の革命路線をまもる忠実な哨兵となつて、偉大な指導者毛主席にたいする、自覚的で徹底した忠誠心を集中的に表現した。

「革命に殉じた何千何万の戦士たちは、人民の利益のために、われわれに先だって英雄的に身を犠牲にしたのである。われわれは高だかとかれらの旗をかかげ、かれらの血の跡をふんで前進しよう！」門合同志の勇敢な死は、わが党にとつて損失であり、わたしたちもひとりの親密な戦友をうしなつた。だが、死んでも精神は生きており、かれはその輝かしい一生によつ

て、「毛主席の革命路線のためにしっかりと歩哨に立ち、持ち場を守り、戦う！」という誓いを表現し、毛沢東思想の輝きに映える、私心のない、おそれを知らぬ共産主義の戦士のけだかい姿を示してくれた。わたしは門合同志に学び、かれのように、すべて毛主席に思いをはせ、すべて毛主席に服従し、すべて毛主席にしっかりとしたが、い、すべて毛主席のためにつくし、かれのように、毛主席のプロレタリア革命路線をまもる忠実な哨兵になりたいと思う。

練兵場での忘れられない話

門合同志生前の所属中
隊の分隊長、五好戦士 王和銀

一九六四年、ふるい戦士が除隊してまもなく、わたしは上級から第五分隊の分隊長になるよう命じられた。そのとき、わたしは、全分隊をりつばなものにして、第一位とまではいかなくとも、第二位はとってやろうと思案していた。ちようどそのころ、反革命修正主義分子羅瑞卿がまきおこした「軍事技術大競演」の邪風がますますひどくなってきて、わたしは一時方向を見失ってしまった。いまは、どこもかしこも軍事技術の競演だ、軍事を「前面に押し出し」、それを披露しさえすれば、だれだって第五分隊は大したものだといってくれるだろう、とわたしは考えた。そこで、ひまというひまをのがさないで、技術をみがき、戦術動作を練った。

ある日の午後、わたしは全分隊を組織して戦術動作の演習をおこなっていた。同志たちは敵にたいして強い警戒心をもち、真剣に行動した。本来ならこれをたたえなければならないのだ

が、わたしは技術を披露することが頭にあり、みてくれのよいことを考えていたので、逆に、この同志の動作はきちんとしていないのだ、あの同志のうけ答えはきはきしていないのだ、とやたらに批判し、自分もいらだって汗だくになった。

休憩のときに、門指導員がわたしのところに来てきた。かれは思いやり深く、「第五分隊長、なんでそんなにいらいらしているのかね」とたずねた。わたしは、「こんなに簡単ないくつかの動作さえ、毎日練習しているのにならぬか、いかに簡単なことです。分隊長もまったく骨がおれま

す」と答えた。門指導員は何か思いあたるような様子で、しきりにうなずいていた。かれは、まるでわたしの心のうちをみすかしたように、わたしの肩に手をかけて腰をおろさせ、わたしとうちとけて話をしてくれた。

「指導員、どうしたら分隊長をりっぱにつとめることができますのです。経験を話してくださいませんか」わたしは門指導員が腰をおろすのをまぢかねたように、問題をきり出した。門指導員は笑いながら、「わたしも、ちょうどそのことできみと話をしようと思っていたところだ」といって、わたしに、どうやって第五分隊をよくするつもりか、とたずねた。そこで、わたしは自分なりに考えていることをいくつかのべた。それを聞いてかれは、「王君、きみは少

し変わってきたな。毎日、軍事のことばかり口にし、技術を披露することばかり考え、実際に形式的なことばかりやっている。そんな調子でやっていたら、第五分隊を横道にひきずりこむことになるぞ。毛主席は、『思想教育をつかむことは、全党を團結させて偉大な政治闘争をおこなわせる中心的な環境である』といっているが、きみは毛主席の教えどおりに仕事をしなければいけない」と指摘してくれた。そのとき、わたしはふた言み言弁解して、軍事に力をいれるのは「四つの第一」を実行するためです、といった。門指導員はこのことを聞くと、たいへん心配そうに、董存瑞の話聞いたことがあるか、とわたしにたずねた。かれは立ちあがって、左手でピストル・ケースをしつかりとにぎり、右手をうえにあげて、董存瑞が手で爆薬を支えたポーズをしてみせた。そして、わたしに「董存瑞は手で爆薬を支えて敵のトーチカを爆破し、大切なときに、身を挺して革命のために犠牲となったのだ。これは、なにもかれが平素からこの動作をよく練習していたからできたのではない。かれが思想をりっぱにきたえ、政治的自覚を高めたからであり、毛主席に限りなく忠誠をつくす赤い心があったからだ」といった。かれはつついて、軍事技術は人がにぎるものだ、軍事技術の威力を発揮させようと思うなら、またひとつの分隊をりっぱに指導しようと思うなら、思想・政治工作を重視しなければなら

い、思想をきたえ、作風をきたえる面に力をいれるべきだ、とくりかえしわたしにいつてくれた。そして最後に、毛主席の『党内のあやまった思想の是正について』というこの輝かしい著作を真剣に学ぶようにと、何度も何度もわたしに念をおした。

その夜、門指導員はまた第五分隊にやってきて、みんなに、「これまで、われわれは人の政治的自覚にたよっていくさに勝ってきたが、これからも、いくさに勝つには人の政治的自覚にたよらなければならぬ。きみたちは、どんなことがあっても四つの第一を堅持していかなければいけない」と語った。

門指導員の話は、まるで清涼剤のように、わたしの頭をはっきりさせてくれた。その晩、わたしは寝返りばかり打ってまんじりともしなかった。毛主席の偉大な教えを思い出し、林副主席の重要な指示を思い出し、一ヵ月余りの間に分隊内に発生したあれこれの問題が頭に浮かんできて、自分は軍事技術大競演の邪風に吹かれて方向を見失っているのを感じた。

翌日、わたしは党の小組長をたずねて、かれといっしょに分隊内の問題を研究し、軍事点ばりの観点の誤りを点検し、どのようにして「毎日の学習」を強化するか、どのようにして「一帮一（一对一で助けあう）」、「一对紅（ともに赤くなる）」の活動を深くくりひろげるかなど

を討議した。このときから、われわれの分隊の政治的空気はだんだんと濃くなっていった。

門合同志はこのように、高度の政治的責任感をもって、わたしや同志たちが毛主席の建軍路線を堅持し、プロレタリア階級の政治を先行させる道をあくまで歩むよう援助してくれたのである。門合同志は左派支持工作のなかで、毛主席の革命路線をまもり、二十七名の階級の兄弟をまもるために、勇敢に身をささげた。わたしたちは毛沢東思想の偉大な赤旗をいっそう高くかかげ、門合同志を手本として、「いつも毛主席の革命路線のためにしっかりと歩哨にたち、持ち場をまもり、戦い」、毛主席をまもり、毛沢東思想をまもり、毛主席の革命路線をまもるために一生涯戦いぬく決意でいる。

毛主席の革命路線に限りなく忠誠
をつくしたりっぱな幹部——門合

1970年 初版発行

定価 60 円

出版者

外文出版社
(北京阜成門外百万莊)

発行者

中国国際書店
(北京 P. O. Box 399)

編号: (日)11050-63

11-J-754D

00034

¥100